

## 契約講の社会人類学的研究?- 山形県最上郡および西村山郡の事例-

著者	高橋 統一, 清水 浩昭, 芳賀 正明, 高尾 公矢, 松本 誠一
著者別名	TAKAHASHI Toichi, SHIMIZU Hiroaki, HAGA Masaaki, TAKAO Kimiya, MATSUMOTO Seiichi
雑誌名	アジア・アフリカ文化研究所研究年報
巻	16
ページ	35-94
発行年	1981
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00010226/">http://id.nii.ac.jp/1060/00010226/</a>

# 契約講の社会人類学的研究Ⅱ

—— 山形県最上郡および西村山郡の事例 ——

は し が き

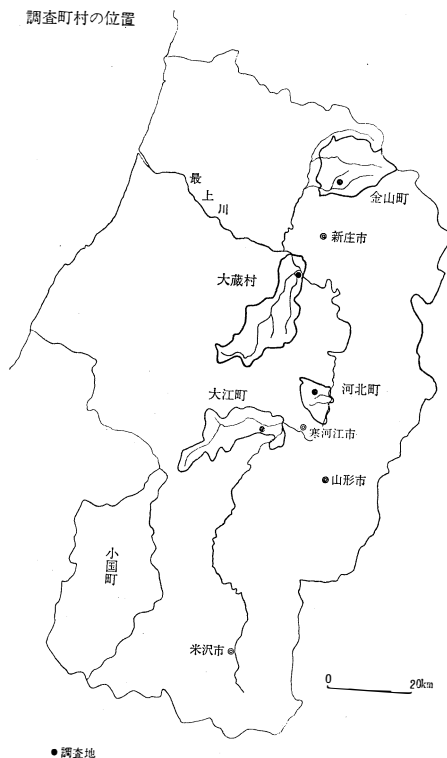
本稿は「契約講の社会人類学的研究Ⅰ」<sup>(1)</sup>の続篇で、前稿が山形県南部(西置賜郡小国町)の調査事例報告を主な内容としたのにつづき、同県北部及び中部について、その後に調査した諸事例の報告である。北部の最上郡大蔵村と金山町を一九七九～八一年、中部の西村山郡大江町と河北町を一九八〇～八一年にわれわれ五名が共同で調査したのだが、すべての調査地に各時期、全員が揃って参加したわけではない。<sup>(2)</sup>〔下図参照〕

したがって以下の執筆分担にもみられるように、各調査地への各人の関わりあいには、おのずから濃淡があるが、本稿全般を通じての叙述では、資料情報の交換や執筆調整を行ったので、全員が関わりあっている。その際、全体的な討論もいろいろしたが、最終的なとりまとめは高橋が行った。ただし執筆期限や紙数の制約から完全な論稿を達成することができなかったもので、いわば中間報告のかたちをとらざるを得なかった。いずれ他日、前稿とも併せて総括的な研究にしたいと考えている。

契約講の社会人類学的研究Ⅱ

高橋 統一 清水 浩昭  
芳賀 正明 高尾 公矢  
松本 誠一

調査町村の位置



契約講の分布と諸形態については、前稿の冒頭に「ケイヤク慣(行事例集)」で従来の文献・報告による七十例から、やや詳しく概説し且、いわゆる村契約に当る(株講及び講組的なものを含む)契約講の主な分布が、東北地方南部とくに宮城・山形両県にみられ、また調査報告は三陸・牡鹿や置賜・最上に多いことを指摘した。本稿はわれわれ自身の山形南部(置賜)の

調査事実には、北部（最上）と中部（村山）を追加することによって、資料の蓄積をはかるとともに、前稿での研究視角をさらに拡充深化しようという意図<sup>(3)</sup>している。前稿で触れた従来の諸研究にみられる問題点及びわれわれの置賜調査での問題点が、本稿において右の意図に沿って進展したかどうかは、現段階ではあまり明確とは云えないが、若干の前進はなし得たと思う。これについてはあとがきで言及したい。

各調査地では、お名前をあげきれぬほど多くの方々の御好意、御便宜をいただき心から感謝する次第だが、特に御世話になった若干の方については、それぞれの調査報告の中でその旨、記してある。また、調査地選定の段階で有益な示唆を賜った山形県の代表的な地方史家・民俗学者の今田信一及び大友義助の両先生及び東洋大学文学部の大島建彦教授にあらためて御礼を申し上げる次第である。

執筆分担は次の通りである。各章の執筆分担は章末に付してある。

はしがき	高橋統一
第一部	芳賀正明・高尾公矢
第二部	松本誠一・清水浩昭
第三部	松本誠一・清水浩昭
第四部	松本誠一・清水浩昭
あとがき	高橋統一

なお、本稿は昭和五十五・五十六年度の文部省科学研究費による研究報告の一部である。

## 注

- (1) 高橋統一・清水浩昭・高尾公矢・松本誠一「契約講の社会人類学的研究Ⅰ——山形県西置賜郡市野々・大石沢の事例——」『社会人類学年報 Vol. 4 1978』一七三～二〇六頁。
- (2) 調査にはわれわれ五名の他に、東洋大学大学院学生の林秀光（台湾からの留学生）と佐野正彦、小沢康則、大学院聴講生の宇治伸、学部学生の石合義昌、栗山充敬、土屋健一、芝本和代、金井しず子らが随時参加し、また資料の分類整理にも協力した。
- (3) 山形県の日本海側いわゆる庄内地方には契約講はあまりみられぬので、県内の調査地選定からは一応、除くことにした。宮城県の三陸牡鹿は従来から調査報告が比較的地方なので、いまのところ調査は考えていない。これら以外の東北地方南部やその周辺については今後、機会があれば調査したいと思う。

## 第一部 最上郡金山町「町部」の事例

### はじめに

この第一部では、最上郡金山町<sup>カネヤマ</sup>の中心部をなす四部落（七日町・十日町・羽場<sup>ハバ</sup>・内町<sup>ウチマチ</sup>）に現存する契約講の調査結果を報告する。調査は、昭和五十四年七月、同十一月、昭和五十五年八月、同十一月、昭和五十六年八月の計五回行い、のべ日数は二十日を越える。実地調査に入る前、我々は、金山町の羽場という部落に昔からの形態を留めた契約講が存在し、かつこの契約講には羽場部落の全戸が加入しているわけではないという情報を得ていた。そこですぐに頭に浮んだのは、この契約講は「株講」的性格のも

のではないかとということであった。そんないささかの期待を持ちながら現地に赴いたのであったが、第一回の調査から我々は予想外のことに出口を失ってしまった。まず第一に、調査予定地に行っていた羽場部落は、従来我々が調査対象にしてきたいわゆる農村部とは異なり、他の三部落（七日町・十日町・内町）と隣接して金山町の中心部を構成する商店街・住宅街の一部といったおもむきの強い地域であったということである。第二に、我々が聞き及んでいた契約講（本文で触れるが、この契約講とは「元契約」のことであった）は、確かに羽場部落に存在し、かつ羽場部落の一部のイエしか加入していなかったことは事実なのだが、話を聞いてみると、むしろこの契約講は隣の十日町を中心に形成されたものであり、現在の議員は、全四十戸のうち、十日町二十四戸、羽場十五戸、七日町一戸と三部落に分散していることが判明したのである。さらにまた、聞き取りを続けていく過程で、内町をも加えたこの四部落一帯には、その他にかなり多数の、目的・機能を同じくする契約講が存在しているという事実を知ったのである。<sup>(1)</sup>

はつきり言って、これは驚きであった。そして、我々は当初の調査計画の変更を余儀なくされた。この地域の契約講の実態を把握するためには、羽場部落だけを調査したのでは充分でなく、四部落一括して調べる必要に迫られたわけである。調査はまず、この四部落内に一体いくつの契約講が存在するかを確認する作業から始まった。この作業は実のところ、かなりの困難を極めた。というのも、地元の人々は、自分が加入している契約については知っていても、他の契約についてまでは正確に把握していないことが多かったからであり、さらには、第一章で述べるように、同一契約が二つの名称で呼ばれる場合もあったからである。結果的には、四部落に合計十

二の契約講が存在することを確認したわけであるが、この確認作業を通じて、我々はこの地域の契約講が、現状をみる限り、最上地方一般にみられる契約講、ならびに同じ金山町でも周辺農村部に見い出される契約講とは、組織・機能の面で若干性格を異にしているという認識をもつに至ったのである。その理由の大部分は、この四部落がいわゆる農村部とは異なり、商店・住宅を中心とする「町」を形成していることに求めることができるであろう。事実、この金山町は江戸時代から新庄藩主戸沢氏に仕える丹一族（現在でもその子孫が内町に住んでいる）が代々城を構えていた城下町であり、現在の内町は以前城前と呼ばれ、また七日町・十日町は秋田湯沢藩に通ずる旧街道筋の宿場町でもあったのである。つまり、江戸期よりこの四部落一帯（ただし、羽場は金山川をはさんで川向こうにあり、以前は戸数も少なく——明治五年の記録では五戸のみ——十日町の一部であったが、昭和二十六年一部落として独立した）は、「町」的性格を有していたことになる。

そのようなわけで、これから以下本文で報告する契約講の事例は、従来我々も発表し、また他の多くの研究者たちによってもなされてきた契約講研究とは、多少ニュアンスを異にする。言わば「町部」における契約講の社会人類学的研究と呼んでもよいであろう。もちろん、最上地方一般にみられるいわゆる農村部の契約講と全く違うというわけではないので、通時的視点から農村部との対比も含めて記述していきたいと思う。

最後に一点付記しておきたい。今回の我々の報告においては、調査対象を先にあげた十二の契約だけに限定してある。地元の人から間接的に聞いたところによれば、この金山町「町部」四部落には、その他に「嬬契約」



とか「念仏講契約」といった、目的を異にする「契約」がいくつか存在しているようである。本来ならば、そしてまた我々の従来よりの関心からすれば、そうした「契約」をも含めて調査・研究すべきものであるが、今回は残念ながら手が届かなかった。他日、機会が許せば、調査・検討を加えてみたい。

なお、今回の調査にあたっては、現地金山町の多くの方々にお世話になった。なかでも、金山町教育委員会の斎藤忠氏、ならびに同町町史編集委員会の三上十郎氏には多方面にわたる御協力を賜った。また、各契約の代表者（講長）の任にある方々も、我々の数度にわたる訪問に心よく応じて下さった。その他、御名前をいちいち記せないが、我々の意図を御理解下さり、調査協力を惜しまれなかった方々は枚挙にいとまがない。記して感謝の意を表したい。また、一連の調査ならびに資料整理においては、東洋大学の学生石合義昌、栗山充敬、土屋健一の三君に、さらに「分布図」作成・古文書整理にあたっては、東洋大学アジア・アフリカ文化研究所の竹内老子氏に御協力を仰いだ。あわせて感謝申し上げたい。（芳賀）

## 第一章 金山町の概況

### 1 調査地の概況

金山町は、山形県北部に位置し、北と西は真室川町、東は秋田県雄勝町、南は新庄市に接している（「はしがき」付図参照）。

現在の金山町は全部で三十一の部落から成り立っているが、我々の調査は町部四部落を中心として行われた。「はじめに」でも述べたように七日町から羽場にかけての旧街道沿には七日町・十日町・羽場・内町の四部落

が一区所にあつまっており、役場・商店街もこの一角にあって、「町部」はいわば金山町の中心部といえる（写真参照。なお、四部落の位置については、「金山町契約加入世帯分布図」——以下「分布図」と略す——を参照）。「町部」は奥羽本線新庄駅からバスで三十分の距離にある。現在の「町部」四部落は行政区画であり、外見上部落ごとの境界を知るのは困難となっている。地域住民は日常生活においてこの四部落を同一視しているようである。

現在の金山町は江戸時代（一六二二年）に新庄藩主戸沢政盛によって支配され、それ以後明治四年の廃藩置県に至るまでの二五〇年間、新庄藩に属していた。現在の「町部」は、江戸時代には城下町の内町と宿場町の七日町・十日町から成り立っていた。明治期には旧街道沿の七日町・十日町を中心として発展してきたのであるが、明治三十八年の奥羽本線開通に際し、住民が金山町通過に反対したため、鉄道は金山町を迂回して敷設され、その結果人の流れが大きく変ってしまった。それ以後「町部」は宿場町としての性格を次第に失っていったが、金山町の中心部であることには変わりがなかった。

明治五年の壬申戸籍によれば、「町部」は七日町・十日町・内町（當時は城前と呼ばれていた）の三部落で構成され、戸数一二四、人口一〇七二となっている。大部分の人が農業に従事していたが、大工・木挽・日雇・鍛冶屋・豆腐行商・医師・質屋・染物行商などもみられる。

戦後の世帯数および人口の動態をみると（表1）、「町部」全体の世帯数は、昭和二十五年以降増加の傾向がみられ、とくに七日町の増加が著しく、羽場も昭和五十年に若干減少しているが、この三十年間に二十戸ほど増加

している。十日町は昭和四十五年以降に停滞の傾向がみられ、内町は漸次減少している。したがって、「町部」

の戦後における世帯数の増加は七日町が中心であり、それに羽場・十日町が若干かわっていることになる。こうした世帯数増加は、正確な裏付け資料があるわけではないが、役場や住民からの聞き取りにもとづけば、主として「町部」内の世帯分離に起因し、部分的には金山町農村部からの転入によって、一方、「町部」全体の人口は、戸数の増加とは逆に昭和三十五年をピークに漸次減少の傾向がみられるが、昭和五十五年は増加に転じている。部落別でみると、七日町は昭和四十年まで増加し続け、以後わずかに減少し、昭和五十五年で再び増加している。他の三部落は昭和五十年まで漸次減少し続け、やはり昭和五十五年には増加に転じている。平均世帯員数は、「町部」全体で、昭和二十五年度の五・四人から昭和五十五年四・〇人と一・四人減少している。

表1 部落別世帯数・人口

	昭和25年				昭和30年				昭和35年				昭和40年				昭和45年				昭和50年				昭和55年			
	世帯数	人口	平均世帯員		世帯数	人口	平均世帯員		世帯数	人口	平均世帯員		世帯数	人口	平均世帯員		世帯数	人口	平均世帯員		世帯数	人口	平均世帯員		世帯数	人口	平均世帯員	
七日町	143	777	5.4		175	924	5.3		218	989	4.5		230	1023	4.4		234	996	4.3		242	992	4.1		272	1068	3.9	
十日町	152	827	5.4		155	815	5.3		164	768	4.7		171	731	4.3		160	652	4.1		163	627	3.8		167	648	3.9	
羽 場	93	561	6.0		96	549	5.7		103	549	5.3		105	521	5.0		112	482	4.3		106	439	4.1		112	476	4.3	
内 町	78	365	4.7		71	360	5.1		73	346	4.7		69	296	4.3		68	277	4.1		66	262	4.0		64	271	4.2	
計	466	2530	5.4		497	2648	5.3		558	2652	4.8		575	2571	4.5		574	2407	4.2		577	2320	4.0		615	2463	4.0	

昭和五十五年の国勢調査結果ならびに農林業センサスによって、「町部」の農家比率をみると、農家が八十九戸、非農家が五二六戸、農家比率は四・五％である（金山町全体では、農家一〇五〇戸、非農家七一戸、農家比率五十九・六％、「町部」を除いた農村部だけでみると、農家九六一戸、非農家一八五戸、農家比率八十三・九％である。この数字をみただけでも、「町部」がいかに非農村的であるかがわかるであろう）。部落別では、七日町は農家が三十戸、非農家が二四二戸、農家比率は十一・〇％で、十日町は農家が十六戸、非農家が一五一戸、農家比率は九・六％であり、両部落とも農家比率は二十％以下であるが、羽場は農家が二十三戸、非農家が八十九戸、農家比率は二十・五％、内町は農家が二十戸、非農家が四十四戸、農家比率は三十一・三％で、羽場と内町の農家比率が七日町と十日町に比べ高くなっている。農家のうち専業農家は七日町と十日町に各一戸、羽場と内町に各二戸があるだけで、兼業化が進んでいる。兼業農家のなかには出稼ぎに出る世帯もある。

山形県北部は全国でも出稼ぎ者を多く輩出している地域として知られている。この地域の出稼ぎのタイプは「冬型」と呼ばれるもので、十月下旬頃から翌年四月下旬頃まで出稼ぎに出る。<sup>(2)</sup>

金山町役場の調査資料によって、出稼ぎの実態をみると(表2)、出稼ぎは近年減少する傾向がみられ、金山町の「町部」以外では昭和四十七年から急激に減少し、それ以降も漸次減少の傾向がみられる。ところが、「町部」では昭和四十五年から漸次出稼ぎが減少し、昭和四十七年から急激に減少するという傾向がみられる。

「町部」の出稼ぎ世帯数を部落別にみると、時期を問わず十日町の出稼

ぎ世帯数がもっとも多く、次いで七日町と羽場がほぼ同数であり、内町がもっとも少なくなっている。とくに十日町の場合には他の部落に比べ一世帯から複数の者が出稼ぎに出ている世帯の多い点が注目される。

各部落について部落世帯数に対する出稼ぎ世帯の割合を算出すると(表3参照)、昭和四十五年では、七日町は十三・二%、十日町は二十九・四%、羽場は二十五・〇%、内町も二十五・〇%(四部落全体では二十一・四%)の世帯が出稼ぎに出ていることになる。昭和五十年では、七日町は八・三%、十日町は十一・〇%、羽場は十八・九%、内町

表2 出稼ぎ世帯数・人数

	昭和45年		昭和47年		昭和50年		昭和53年	
	世帯数	人数	世帯数	人数	世帯数	人数	世帯数	人数
七日町	31	33	31	32	20	21	17	18
十日町	47	55	42	52	18	21	21	27
羽場	28	31	25	31	20	23	19	20
内町	17	19	16	16	11	11	6	7
「町部」の合計	123	138	114	131	69	76	63	72
金山町の「町部」以外	852	1236	855	1267	659	860	599	721
金山町	975	1374	969	1398	728	936	662	793

表3 出稼ぎ世帯の割合

	昭和45年	昭和50年
七日町	$\frac{31}{234}$ (13.2)	$\frac{20}{242}$ (8.3)
十日町	$\frac{47}{160}$ (29.4)	$\frac{18}{163}$ (11.0)
羽場	$\frac{28}{112}$ (25.0)	$\frac{20}{106}$ (18.9)
内町	$\frac{17}{68}$ (25.0)	$\frac{11}{66}$ (16.7)
「町部」の合計	$\frac{123}{574}$ (21.4)	$\frac{69}{577}$ (12.0)
「町部」以外の金山町	$\frac{852}{1154}$ (73.8)	$\frac{659}{1147}$ (57.5)
金山町全体	$\frac{975}{1728}$ (56.4)	$\frac{728}{1724}$ (42.2)

(注) 表示は  $\frac{\text{出稼ぎ世帯数}}{\text{総世帯数}}$  (割合%)

は十六・七%(四部落全体で十二・〇%)の世帯が出稼ぎに出ている。これを、金山町全体及び、「町部」を除く農村部と比べてみると、昭和四十五年では、金山町全体五十六・四%、農村部七十三・八%、昭和五十年金山町全体四十二・二%、農村部五十七・五%で、「町部」の二十一・〇%(昭和四十五年)、十二・〇%(昭和五十年)という比率がきわめて低いものであることがわかる。当然これは、前述した農家世帯数の少なさに対応するものである。

金山町の出稼ぎの実態をみる限り、出稼ぎは地元において兼業機会が少なく、農業収入だけでは生活水準を維持できないために、それ補うための恒常的な所得獲得手段となっているようである。「町部」において出稼ぎ世帯比率が低いのはもともと農家戸数が少ないうえに、兼業機会が得やす

いからだと考えられる。その一つとして、冬期における交通の便があげられる。つまり、金山町一帯は冬になると、積雪が一メートルから二メートルになり、通勤が不便になるが、「町部」から新庄市へ通じる国道十三号線は、除雪車によって確実に足が確保されるのである。それに反して、周辺農村部は交通が遮断され、一時的に「陸の孤島」になることもしばしばであり、この点からも、出稼ぎを余儀なくされているといえるのである。

## 2 契約の概況

「町部」には、元契約（十日町契約とも呼ばれる）・中契約・七日町契約（元契約とも呼ばれる）・内町契約・柳町契約・新契約・大正契約・第三契約（昭和契約とも呼ばれる）・上河原契約・平和契約・新生契約・むつみ契約と呼ばれる十二の契約がある（表4参照）。

各契約の成立時期については（表5参照）、古い契約の場合記録・文書が焼失ないし紛失しているために正確な成立時期を知ることができないが、現存する記録・文書の内容から推して、元契約・中契約・七日町契約・内町契約が江戸時代には成立していたとみることができる（写真参照）。大正期に新しく三つの契約が結成され、昭和初期の一つ、昭和三十年から昭和三十二年に四つの契約が結成されている。昭和三十二年に結成された契約を最後にして、それ以降に結成された契約はない。

各契約の加入戸数は、最大で四十戸、最小で十八戸である。「町部」の契約についてみる限り契約の戸数は四十戸が最大限であり、四十戸を越えると機能的に困難が生じるようである。

契約の戸数は必ずしも固定化されているものではなくて、「町部」の世

表4 部落別契約加入状況(昭和55年11月現在)

	七日町	十日町	羽 場	内 町	計
元 契 約	1( 2.5)	24(60.0)	15(37.5)	—( — )	40(100.0)
中 契 約	7( 29.2)	13(54.2)	3(12.7)	1( 4.2)	24(100.0)
七 日 町 契 約	35(100.0)	—( — )	—( — )	—( — )	35(100.0)
内 町 契 約	1( 2.5)	—( — )	—( — )	39(97.5)	40(100.0)
柳 町 契 約	28(100.0)	—( — )	—( — )	—( — )	28(100.0)
新 契 約	1( 2.6)	17(44.7)	20(52.6)	—( — )	38(100.0)
大 正 契 約	15( 83.3)	1( 5.6)	—( — )	2(11.1)	18(100.0)
第 三 契 約	1( 3.3)	17(56.7)	11(36.7)	1( 3.3)	30(100.0)
上 河 原 契 約	3( 15.8)	16(84.2)	—( — )	—( — )	19(100.0)
平 和 契 約	2( 6.2)	15(46.9)	15(46.9)	—( — )	32(100.0)
新 生 契 約	29( 96.7)	—( — )	1( 3.3)	—( — )	30(100.0)
む つ み 契 約	19(100.0)	—( — )	—( — )	—( — )	19(100.0)
計	142( 40.2)	103(29.2)	65(18.4)	43(12.2)	353(100.0)
昭和30年「町部」世帯数	175( 81.1)	155(66.5)	96(67.7)	71(60.6)	497( 71.0)
昭和55年「町部」世帯数	272( 52.2)	167(61.7)	112(58.0)	64(67.2)	615( 57.4)

(9)総会場所	(10)総会当番	(11)総会費 (1戸当り)	(12)不幸当番	(13)野若勢・ツプシ (火葬場建設以前)	(14)ワラ(火葬場建設以前) ワラ代金(火葬場建設以後) (1戸当り)	(15)蒸し番	(16)蒸し料 (1戸当り)
昭和45年までは本・添別々に当番宅で開催 昭和46年から一同に会して十日町公民館で開催	1組～4組のうちひと組が担当	賄費1,100円 (昭和43年) 年間積立金500円	不幸宅が所属する組	不幸当番以外の30人 ツプシ金300円 (昭和40年)	ワラ6束 ワラ代金500円(昭和50年)	屋押して10戸	蒸し番の10人が各自餅米1升・野菜等持ち出し
原則として当番の家で開催 しかし、昭和55年は十日町公民館で開催(今後は運動的)	東組～北組のうちひと組が担当	賄費1,000円 (昭和54年) 年間積立金なし	不幸宅が所属する組	不幸当番以外の18人 ツプシなし	ワラ10束 ワラ代金1,000円 (昭和54年)	なし	なし
七日町公民館で開催	1組～5組のうちひと組が担当	賄は廃止、折詰代として徴収	不幸宅が所属する組	不幸当番を含む全議員 ツプシ金300円 (昭和40年)	ワラ8束 ワラ代金100円	屋押して10戸	現金200円 (昭和53年から) 餅米5合・野菜(漬物は蒸し番持ち出し)
内町公民館で開催	1組～4組のうちひと組が担当	賄費1,070円 (昭和53年) 年間積立金200円	不幸宅が所属する組	不幸当番以外の30人 ツプシ金日当の7割	ワラ6束 ワラ代金50円	1組と2組(計20戸)、3組と4組(計20戸)がそれぞれひと組となり交互に担当	餅米5合・小豆・野菜・漬物 現金20円
昭和35年まで当番宅で開催 昭和36年から七日町公民館で開催	1組～4組のうちひと組が担当	賄は廃止、折詰代として徴収 年間積立金500円	不幸宅が所属する組	不幸当番以外の21人 ツプシ金100円 (昭和36年)	ワラ8束 ワラ代金150円(昭和54年)	1組～4組のうちひと組が担当	餅米5合・小豆1皿・野菜 現金100円 (昭和46年から)
昭和37年までは元・添別々に当番宅で開催 昭和38年から十日町か羽場の公民館で開催	1組～4組のうちひと組が担当	賄費700円 (昭和52年) 年間積立金300円	不幸宅が所属する組	不幸当番以外の全議員 ツプシ金250円 (昭和37年)	ワラ6束(昭和37年) ワラ代金700円(昭和51年)	昭和47年に廃止 以て蔵屋押して10戸	なし
昭和50年までは当番宅で開催 昭和51年からは当番宅か温泉で開催	屋押して4戸ひと組が担当	総会は温泉で開くのでかかった費用を徴収 年間積立金なし	蒸し番とあわせて6戸	不幸当番以外の11人 ツプシなし	ワラ10束 蒸し代とあわせて500円(昭和52年)	不幸当番とあわせて屋押して6戸	餅米1kg・小豆・野菜(漬物は蒸し番持ち出し) ワラ代金とあわせて現金500円 (昭和52年)
昭和50年までは当番宅で開催 昭和51年からは十日町か羽場の公民館で開催	1組～6組のうちひと組が担当	賄費1,150円 (昭和54年) 年間積立金300円	不幸宅が所属する組	不幸当番以外の25人 ツプシ金日当の半額	ワラ8束(昭和33年) ワラ代金100円	屋押して10戸	餅米1升・野菜・漬物 現金は当番持ち出し
当番宅で開催	1組～3組のうちひと組が担当	賄費1,200円 (昭和54年) 年間積立金なし	不幸宅が所属する組	不幸当番を含む全議員 ツプシ金日当分	ワラ10束 ワラ代金200円	1組～3組のうちひと組が担当	餅米3合・漬物・煮物 現金100円
十日町か羽場の公民館で開催	1組～4組のうちひと組が担当	賄費1,200円 (昭和54年) 年間積立金100円	不幸宅が所属する組	不幸当番を含む全議員 ツプシ金日当の半額	ワラ8束(昭和38年) ワラ代金100円 (昭和51年まで) 昭和52年よりワラ代金を廃止	1組～4組のうちひと組が担当	餅米1升・野菜・漬物 現金50円
七日町公民館で開催	1組～5組のうちひと組が担当	賄費1,100円 (昭和54年) 年間積立金なし	不幸宅が所属する組	不幸当番を含む全議員 ツプシ金日当の半額	ワラ8束 ワラ代金100円	1組～5組のうちひと組が担当	餅米5合・小豆・野菜・漬物 現金200円
原則として当番宅で開催(温泉の場合もある)	1組～3組のうちひと組が担当	賄費1,000円 年間積立金1,200円	不幸宅が所属する組	不幸当番以外の全議員 ツプシ金日当分	ワラは現物で集めずワラ代として500円(昭和40年) 現在ワラ代金はなし 年間積立金より講全体3,000円不幸宅へ出す	1組～3組のうちひと組が担当	餅米5合・野菜・小豆・漬物 現金は当番持ち出し

表5 契約の概要

契約の名称	(1)戸数	(2)分 布	(3)成立時期 (現存する記録に 載される範囲)	(4)組の構成	(5)加入金・脱退金	(6)備品 (主なもの)	(7)備品保管場所	(8)総会期日
元 契 約 (=十日町 契約)	40戸	七日町1 (2.5%) 十日町24 (60.0%) 羽 場15 (37.5%)	文久2年(1862)以 前	本一5戸 } 10 戸 添二5戸 } (1組) 本二5戸 } 10 戸 添三5戸 } (2組) 本三5戸 } 10 戸 本四5戸 } (3組) 添四5戸 } 10 戸 本五5戸 } (4組)	加入金：特になし 脱退時：権利放棄	膳檜30人前 銘々盆30枚 屏風半双 仏具一式	一講員の蔵に保 管を依頼	昭和42年まで 旧暦10月20日 昭和43年から 新暦11月10日 昭和46年 から 新暦11月5日 開会時刻：正午
中 契 約	24戸	七日町7 (29.2%) 十日町13 (54.2%) 羽 場3 (12.5%) 内 町1 (4.2%)	寛永5年(1628)	東 } 西南 } 各6戸 北 }	加入金：特になし 脱退時： 棚放棄	膳25人前 四ツ椀25人前 平25人前 二ノ汁25人前 木皿25人前 仏具一式	総会当番の組の 蔵または倉庫の ある家に保管	明治42年まで 旧暦1 月20日 昭和36年から 新暦1 月20日 開会 時刻：正午
七日町契約 (元契約と もいう)	35戸	七日町35(100.0%)	明治32年以前 (古来より契約台 帳あり 失 焼)	1組 } 2組 } 各7戸 3組 } 4組 } 5組 }	加入金：特になし 脱退時： 棚放棄	膳膳40枚 黒御膳40人前 銘々盆40枚 茶椀35ヶ 忌 中 櫛台など 仏具一式	共同倉庫に保管 (柳町・ 並と 同じ倉庫)	昭和35年まで 旧暦10月20日 昭和36年から 新暦11月20日 開会時刻：正午
内町契約	40戸	七日町1 (2.5%) 内 町39 (97.5%)	天保年間(1830- 44)以前	1組 } 2組 } 各10戸 3組 } 4組 }	加入金：15,000円 脱退時：2分の1 返却	膳40人前 椀40人前 黒 銘 盆 30人前 赤銘々盆 29人前 十三仏掛軸な ど仏具一式	専用倉庫に保管	昭和19年まで 旧暦10月20日 その後新暦11月 20日に変更(年 度は不明) 昭和49年から 新 暦1月10日 開時刻：正午
柳町契約	28戸	七日町28(100.0%)	大正2年4月	1組 } 2組 } 各7戸 3組 } 4組 }	加入金：3,000円 脱退時：権利放棄	膳20人前 椀20人前 重箱一揃 屏風一組 敷物24枚 燭台・小刀な ど仏具一式	共同倉庫に保管 (七日町・新生と 同じ倉庫)	昭和19年まで 旧暦10月20日 昭和20年-23年 新暦11月20日 昭 和 24年から 旧 1 月20日 開 時刻：正午
新 契 約	38戸	七日町1 (2.6%) 十日町17 (44.7%) 羽 場20 (52.6%)	大正2年11月	1組 } 2組 } 各10戸 3組 } 4組 } 8戸 (定員は40戸)	加入金：3,000円 脱退時：権 利放棄	膳30人前 銘々盆30枚 屏風半双 薄 銘 盆 金仏講など仏 具一式	専用倉庫に保管	昭和44年まで 旧暦10月20日 昭和45年から 新暦11月20日 昭和47年から 新暦11月10日 開会時刻：正午
大正契約	18戸	七日町15 (83.3%) 十日町1 (5.6%) 内 町2 (11.1%)	大正10年	組は固定化されて おらず総 会 番は 屋押して4戸ひと 組 不幸当番は屋押し て6戸ひと組	加入金：6,000円 脱退時：寸志贈呈	膳椀20人前 屏風 十三仏掛軸 忌中飾台など 仏具一式	契約代表者の家 に保管	結成当時から 新暦10月20日 開 時刻：午前 11 時 (昭和50年まで)
第三契約 (=昭和契 約)	30戸	七日町1 (3.3%) 十日町17 (56.7%) 羽 場11 (36.7%) 内 町1 (3.3%)	昭和8年 旧暦10月20日	1組 } 2組 } 各5戸 3組 } 4組 } 5組 } 6組 }	加入金：1,000円 脱退時：500円返 却	銘々盆30枚 膳20人前 銘々盆30枚 木皿30枚 古刀など仏具 一式	契約代表者の家 に保管	昭和45年まで 旧暦10月20日 昭和46年から 新暦11月10日 昭和51年から 新暦11月第1日 曜 日 開会時刻：午前 11時
上河原契約	19戸	七日町3 (15.8%) 十日町16 (84.2%)	昭和30年10月25日	1組 7戸 } 2組 7戸 } 3組 5戸 }	加入金：20,000円 脱退 時 権利放棄	膳(大)25人前 膳(小)25 人前 銘々盆50 人前 重箱(5重) 前 屏 風組 仏具一式	専用倉庫に保管	結成当時から 新暦10月20日 開会時刻：正午
平和契約	32戸	七日町2 (6.2%) 十日町15 (46.9%) 羽 場15 (46.9%)	昭和31年1月7日	1組 } 2組 } 各8戸 3組 } 4組 }	加入金：5,000円 脱退時：権利放棄	膳30人前 椀椀30人前 銘々 盆 人前 重箱(5重) 組 天目 ち ち ち ち 仏具一式	専用倉庫に保管	結成当時 旧暦10月20日 昭和44年から 新暦11月20日 開会時刻：正午 (集合時刻：11時)
新生契約	30戸	七日町29 (96.7%) 羽 場1 (3.3%)	昭和32年10月20日	1組 } 2組 } 各6戸 3組 } 4組 } 5組 }	加入金：4,000円 脱退時：権利放棄	膳椀30人前 屏風 重箱(5重) 仏具一式	共同倉庫に保管 (七日町・柳町と 同じ倉庫)	結成当時から 新暦10月20日 開会時刻：正午
むつみ契約	19戸	七日町19(100.0%)	昭和32年10月25日	1組 7戸 } 2組 6戸 } 3組 6戸 } (規約によれば最 大2 戸)	加入金：特になし 脱退時：積立金の 30% 廻	膳(大)25人前 膳(小)25 人前 銘々盆50 人前 箱 重 具 仏式	専用倉庫に保管	結成当時から 新暦10月25日 開 時刻：正午

(注) 各項とも特に断わりがない場合は、昭和55年11月現在のものである。項目⑬、⑭に関し、火葬場使用開始は昭和42年1月1日からである。

帯数増加に伴って契約の戸数を増加させてきた契約もある。例えば、内町契約のあるインフォーマントによれば「内町契約の戸数は現在四十戸であるが、五十年ほど前は二十戸ほどで構成されていた」という。江戸時代には結成されていたと考えられるその他三契約の戸数が結成当初から固定化されていたかどうかは定かでない。内町契約については、右に述べたように結成当初から固定化されていたものではないという情報を得ているから、このことを一応考慮しながら「町部」の戸数の変遷と契約加入戸数の関係を見ると、前節で触れたように、明治五年の「町部」の戸数は一二四であり、明治期にはすでに結成されていたと考えられる契約の戸数を合計すれば（元契約四十、中契約二十四、七日町契約三十五、内町契約二十一）とありあえず内町契約の加入戸数を二十とみなすが、実際には、もう少し多かったと思われる）、一一九戸であって、加入していなかった戸数はわずか五戸である。したがって、明治初期では「町部」のほとんどのイエが契約に加入していたと考えてよい（前記、内町契約の加入戸数を二十五と考えれば、「町部」の世帯数と契約加入戸数は完全に一致する）。

大正期につくられた三つの契約と昭和初期につくられた一つの契約をみれば、いずれも十日町（昭和二十六年に十日町から分れた羽場を含む）と七日町を中心に結成されている。このことは大正期あるいはそれ以前から、十日町と七日町を中心に戸数が増加し、以前からあった契約に加入できないイエが集まって新しい契約をつくったと考えられる。というのは、古い契約のうち内町契約をのぞき、他の三つは七日町・十日町に作られていたのであるが、元契約（＝十日町契約）と七日町契約は当時すでに講員数が限度ぎりぎりであったために、新規加入者を受け入れることができなかった

とみられるからである。中契約の場合も、七日町・十日町を中心としていたが、この契約は、「町部」の富裕層を核として構成されていたために、講員数は二十四戸と少なかったにもかかわらず、補充以外の新規加入を認めなかったものと思われる<sup>(3)</sup>。

昭和三十二年までに現在ある契約のすべてが結成されているが、その合計戸数三五三（これは、表3に示しておいたように、我々が調査した昭和五十五年十一月現在のものである。欠員の関係で、昭和三十二年当時もこれと同数であったとは言いきれないが、誤差があったとしても、五戸以内と考えてよい。なお三五三戸というのも、定数を満した数ではない）に對して、昭和三十年の「町部」の総戸数が四九七（昭和三十一年の世帯数資料が得られないため、とりあえず、近いところで昭和三十年の資料を利用する）であるから、昭和三十二年当時は、「町部」の約七十%ほどのイエが、いずれかの契約に加入していたと考えられる。さらに、昭和五十五年でみれば、新しい契約の結成がない一方で、総世帯数は昭和三十年より一一八戸増加しているため、当然加入率は低くなり約五十七%となっている。つまり、現在では四割以上のイエが、契約には加入していないわけで、単純に考えれば、以前に比べて、契約の必要性が少なくなっているということになるであろう。ただ、この点をとって、今日では、契約の意味が失われていると結論づけることは、できないように思う（この点については、第四章の総括であらためて検討することにした）。

次に、各契約の加入世帯の分布状況にふれておこう（「分布図」を参照して頂きたい）。「分布図」を見ればわかるように、今日、各契約に加入しているイエは、四部落内の各所に点在している。つまり隣同士のイエであつ

ても契約は異なるという例が、随所にみられるわけである（なお、この「分布図」には非加入世帯が、記入されていないので、図の上で隣同士であっても、実際には、そのあいだに、何軒かのイエが存在していることもある。さらに、「分布図」作成に際して、分布状況を明確にするため、一つのドットをかなり大きくしてある。その結果、実際のイエの配置と若干ズレている箇所もあるが、御了解頂きたい）。そうしたなかでも、内町契約だけは、ほぼ一ヶ所にまとまっているのが特徴的である。表4をみてもわかるように、内町契約全四十戸のうち三十九戸が内町にあり、残り一戸は七日町にある。この一戸は、内町から移転したイエである（後述するように、「町部」内で移転しても、契約はもとのまま加わっていることができる）。また、内町（部落）の場合、他の三部落に比べて、内町契約以外の契約に加入しているイエが非常に少なく、中契約一戸、大正契約二戸、第三契約一戸だけである。このうち大正契約の二戸は七日町からの、第三契約の一戸は十日町からの移転である（中契約の一戸は不明）。つまり、内町には（もともと戸数が少ないという事情もあるが）、これまで内町契約しか成立しなかったためであり、内町の住民にとって、契約といえは、それは内町契約のことだったと考えてよい。

同様のことは、元契約と七日町契約にもいえそうである。元契約は全四十戸のうち、三十九戸が十日町と羽場にあり、羽場もかつては十日町の一部であったから、例外は、七日町の一戸（これも、移転である―この一戸は、町営の団地に住んでいる）だけである。七日町契約は、現在でも全戸七日町に住んでいる（ただし、国道十三号線との分岐点より以南にあるイエは、移転ないし新規加入であつても、もとは、分岐点以北の旧街道沿

のイエだけで構成されていたと考えられる。分岐点以南に家が建ち始めたのはかなり最近のことである）。図だけみると、元契約と七日町契約は、内町契約ほどにまとまっていないうちにみえるが、これは、それぞれの部落内での移転に加えて、後続の契約が、両契約に加入するイエのあいだを縫うようにして、成立してきたためである。もう一つ、古くからある契約の中契約は十日町と七日町が中心で、羽場の三戸は十日町よりの移転と分家であり、内町の一戸は理由がはっきりしないが、移転と推測される。

明治以降に成立した契約のうち、柳町契約は全戸七日町にあり、分布の中心は、七日町のなかでも国道との分岐点周辺とそれ以南である。以前から、分岐点周辺の七日町は、小字名で柳町と呼ばれ、それが契約の名称にもなっている。新契約は十日町と羽場が中心で七日町の一戸は移転である。大正契約は十日町の一戸、内町の三戸（ともに移転）を除いて、すべて七日町にあるが、七日町の南端にある二戸は七日町中心部よりの移転である。この大正契約は、もともと、七日町契約に加入していない旧七日町沿（分岐点以北）のイエを中心に結成されたものである。第三契約は、新契約と同様、十日町と羽場が中心で、七日町の一戸、内町の一戸はともに移転である。

戦後にできた四契約に目を向けてみよう。上河原契約は、十日町が中心であるが、なかでも十日町の北東部（この地域は、小字名で上河原と呼ばれる）にあるイエから成っている。この地域は戦前ほとんど家のなかったところで、戦後になって道路沿いに家が建ち始めたわけであるが、そうした新しいイエの人々が集まってつくったのが上河原契約である。なお、七日町に点在する残りの三戸は移転によるものである。平和契約は、戦後十



日町と羽場が分離して以後、両部落にまたがつてつくられた契約である。十日町と羽場には、戦前すでに、四つの契約（元・中・新・第三）が存在して、加入世帯も各所に分散する傾向がみられたけれど、この平和契約は、さらにそのあいだに割り込む形で結成されたため、十日町と羽場のほぼ全域に点在することになった。また、新しく家が建ち始めた羽場西部の六戸のイエの加入も特徴的な点である。なお、七日町にある二戸は移転である。次に、新生契約であるが、「分布図」からもわかるように、七日町の分岐点周辺と七日町南端にまとまって分布している。この契約も戦後新しくできたイエを中心にして結成されたものである。羽場の一戸は移転である。最後に、むつみ契約は、十九戸すべてが七日町南部の新興住宅地にあるイエから成っており、ほぼ一ヶ所にかたまっている。これは、むつみ契約の代表者が、我々に語ってくれたように、戦後の町内会的な隣組を基盤にしておつられたことによるものである。一番新しい契約でありながら、江戸期からある古い契約の成立と似たところがある。

以上の説明から、ほとんどの契約が、いずれかの部落を中心に結成されたことがわかるのであり、一種の地縁的結びつきを基礎にしているといえるように思う（例外的なのは中契約であり、また、戦後羽場が一つの部落として成立後、十日町と羽場にまたがつてきた平和契約も例外といえ、いえなくもない——これらの諸点については、第四章で検討する）。そして、ここに、「町部」の契約の特徴が色濃くあらわれているように考えられるのだが、詳しいことは、第四章に譲ることにする。なお、言い忘れたが同じイエが二つ以上の契約に加入している例はない（かつて、あるイエが、一時期二つの契約に加入しているような状況が生じたが、これは移

転によって、契約が変わった際——このこと自体が珍しいケース——、前に入っていた契約の脱退が、時期的に遅れた結果生じたものである。（高尾）

### 第三章 契約の組織

「町部」の契約は、不幸の際の相互扶助を目的として組織されている。七日町契約の規約では、「本組合ノ事業ハ組合員不幸死者アル場合ハ互ニ協力之ヲ救済シ葬祭ノ事務ニ尽力シ罹災者ヲ慰藉スルヲ以テ目的トス」〔昭和三年に改正された規約の一部〕と定められている。この規約は一例であるが、我々が「町部」の他の現存する契約記録を分析した限りにおいては、いずれの契約も七日町契約とほぼ同様である。

契約の組織は、各契約とも五戸から十戸程度の単位で組を構成しており、契約内には三組／＼五組の組が存在する。この組が実際には契約の重要な役割を担うのであって、組の主な役割としては次の三点があげられる。①組内に不幸が出た場合種々の手伝いをする（以下「不幸当番」と呼ぶ）②契約総会時の準備を受け持つ（以下「総会当番」と呼ぶ）③いくつかの契約では、不幸の際、不幸宅の会葬者に出す食事の準備をする（以下「蒸シ番」と呼ぶ）。

組の戸数は各契約内で平均化されている（表5参照）。例えば、中契約では東組・西組・南組・北組各六戸というように構成されている。組の戸数が平均化されているのには、それなりの理由がある。つまり、仮に組の戸数に極端なアンバランスがあれば、不幸当番・総会当番・蒸シ番などの際に人手不足によって支障が生じることになるからである。現在、新契約・上河原契約・むつみ契約の三契約では組の戸数に若干のアンバランスがみら

れる(表5参照)。新契約の場合には規約では講員数四十戸で、組が合計四組各十戸と定めてあるが、現在は四組の二戸が転出したことよって欠員が生じている。我々の調査中加入希望者がいるということを目にしたので、近いうちにはアンバランスが是正されるものと思われる。上河原契約とむつみ契約の場合には、結成当初から組の戸数に若干のアンバランスがあった。上河原契約は講員数十九戸、計三組で結成されたから、もともと組の戸数にアンバランスがあり、その上転出によって現在では一組と二組が七戸、三組が五戸となっている。むつみ契約も規約では二十戸三組となっているが、結成以来二十戸になったことはなく、現在では一組だけが七戸で二組・三組はともに六戸となっている。組の戸数に一戸ないし二戸のアンバランスがあっても不幸当番・総会当番などの際に支障をきたすというようなことはないようである。

十二の契約のうち大正契約だけ、組が固定化されておらず、<sup>ヤ</sup>屋押し(家を基準にして順番を割りふるしくみ)によって、不幸当番・「蒸シ番」および総会当番の組が構成されている(詳しくは表5参照)。組の役割については他の契約と同様である。

組は通例一組・二組と呼ばれるが、現在みられる例外としては、元契約の本・添<sup>モト</sup>と中契約の東組<sup>ヒガシグミ</sup>・西組<sup>ニシグミ</sup>・南組<sup>ミナミグミ</sup>・北組<sup>キタグミ</sup>がある。中契約の場合は一組・二組という名称と同様であって特別な意味はない。ところが、元契約の本・添という名称には特別な意味がかつてはあった。というのは元契約は講員数四十戸で、本一組・添一組各五戸(計十戸)がひと組を構成し、全部で四つの組があるが、昭和四十四年以前は本二十戸と添二十戸が別々の場所で総会を開催していたからである(その理由については後述する)。か

つては新契約・第三契約にも本・添という名称があった。第三契約の場合は、元契約に加入していた人がある事情から元契約を脱退し、当時いずれの契約にも加入していなかった人を集めて新しく契約を結成したという経緯があったため、第三契約の規約は元契約の規約に準じていた。その結果、第三契約にも元契約の本・添という名称が持ち込まれたわけであるが、第三契約の場合には組分けの際の名称としてだけ用い、総会は、本・添に関係なく合同で開いていた(かつては本五戸・添五戸がともに不幸当番を担当していたが、昭和四十二年に町営火葬場が建設されたことよって、人手がいらなくなり、昭和四十三年以降ひと組五戸が担当するようになった)。一方、新契約は元(新契約は「元」<sup>モト</sup>を使用)・添という名称が昭和四十七年頃まで使われており、元契約のようにやはり総会を別々に開催していた。元契約・新契約ともに本(元)・添という名称は総会を別々に開催していた当時は実質的な意味を持っていたのであるが、一同に会して総会が開催されるようになってからは名称の持つ意味は失われた。したがって、現在新契約では元・添という名称は使われなくなっているし、元契約の場合も名称だけが残っているにすぎない。

次に、契約の加入資格であるが、いずれの契約でも「町部」において一戸を構え「町部」の成員として認められたイエであれば、誰でも契約に加入することができることになっている。ところが、「町部」では昭和三十二年以降新しい契約が結成されておらず、現在では一、二の契約を除き各契約とも許容し得る最大の戸数を守っている。契約を脱退するのには「町部」以外入することができない状態となっている。契約を脱退するのは「町部」以外の地域に転出していく場合であって、「町部」内で移転した場合には脱

退しなくてもよいことになっている（この点、必ずしも各契約の規約と一致しているわけではない。というのは、ほとんどの契約が成立時には、構成員を各部落に限定していたからである。ただし、他方で部落内より移転した場合、脱退しなければならぬという「移転条項」が明記されていない契約も多い。結局、規約云々よりも、四部落の一体化をふまえて、「町部」内での移転は脱退条件にしないという方針をとってきた「町部」の契約のあり方をこそ問題にすべきであろう）。契約に加入する場合、正式には契約総会の席で承認されるわけであるが、事前に講員の内諾を得るよう根回ししておくのが一般的である。また、契約に加入することは、講員としての権利を獲得することであるから、契約の権利をメンバーの自由裁量によって勝手に他人に譲渡することは、各契約とも規約によって厳重に戒めている。例えば、七日町契約の規約では「本組合ノ権利ハ売買譲与ヲ禁止ス、家系相続者ニ於テ永久継承スルコト」と定めている。したがって、脱退者が出た場合には脱退者のイエの分家を中心とした親類が加入する場合が多いようである。

契約に加入した場合の主な権利としては、①自分のイエに不幸が生じた場合「不幸当番」の人々から種々の手伝いをしてもらえる②「蒸シ番」の人々から弔問客に出す食事の準備をしてもらえる③契約の備品（膳碗・仏具一式など）を必要に応じて借りられる、の三点をあげることができるが、町営火葬場ができる以前は、「野若勢<sup>ノワカゼ</sup>」の手伝いしてもらえた（この点については第三章で触れる）。

各契約とも契約の財産は、膳碗一式・仏具一式などの葬式に使用する道具が中心であり、田畑・山林などは所有していない。古くからある元・中

・七日町・内町の四つの契約の場合は、過去において田畑・山林などを所有していた可能性も考えられないではないが、現存する契約記録にはそれに関連するような記述が見い出せないし、また古老からの聞き取りによってもそれを裏付ける情報は得られなかった。

各契約とも備品の内容はほぼ同様であって、量は契約戸数の大小によって相違するが、参考までに第三契約の備品の内訳（昭和八年契約台帳による）を掲げておく。

# 備 品

一、銘々盆	三十枚	箱付
一、内朱小惣膳	三十人前	〃
一、同 七寸五分重箱	一組	〃
一、同 紋入五段重箱	十五枚	〃
一、薄畳	一個	シモク付
一、念仏鐘	一個	蓋付
一、鍋 五升焚	二個	
一、コシキ	一斗二個	
一、塗箸	三十人前	
一、木皿	三十枚	
一、屏風	半屏	
一、内朱揃碗	三十人前	
一、階段	一 忌中用	
一、打敷	一枚	
一、仏膳碗	一人前	

一、高月	二個
一、六合	二個
一、天目台	二個
一、机代用小物入外函	一個
一、蟬台	一對
一、燈明立	一對
一、水湯茶椀	二個
一、花立	一對
一、香燈	一ケ
一、古刀	一

ところで、契約に加入すれば、右のような備品を共有することができるから、新規加入者より加入金を徴収する契約もある。加入金の額は各契約によって、また同一の契約によっても年によって異なるが、最近の加入金をみれば、概して古い契約ほど安く、新しい契約ほど高くなっている。これは古い契約は備品自体が古くなっており、備品の多くを現在のメンバーが直接購入したものではないからであり、新しい契約は備品が新しく、現在のメンバーが積立をして購入したものである。例えば、古い契約のうち七日町契約は昭和五十年で五百円徴収し、元契約と中契約は加入金を徴収していない。内町契約だけは一万五千元と高くなっているが、これは新しい備品を購入するための予備費にあてるからだとのことである。ところが、新しい契約のうち昭和三十年に結成された上河原契約は加入金二万円、昭和三十一年に結成された平和契約は五千元と相対的に高くなっ

ている。

なお、契約脱退者は、自主的に契約備品の使用を放棄するものであるから、脱退者には何も与えられない契約が多いが、例外的に内町契約・第三契約では現金（内町契約は代わりに入る人が納める加入金の二分の一、第三契約は五百円）が与えられている。しかし、その額は一般に少なく、脱退者（「町部」からの転出者）に対する契約からの餞別程度に考えられているようである。

契約の備品の保管方法は、各契約によって異なっている。十二の契約のうち備品専用倉庫を所有しているのは、七日町契約・内町契約・柳町契約・新契約・上河原契約・平和契約・新生契約・むつみ契約の八契約である。<sup>(4)</sup>

元契約・中契約・大正契約・第三契約の四契約は専用倉庫を所有していない。これらの四契約のうち、中契約は、総会当番の組で、蔵ないし倉庫のある家が保管している。中契約の場合には「町部」の富裕層が多く加入している（いた）こともあって、組内には蔵のある家が多く、備品保管に關してはとくに専用倉庫を建設する必要がなかったのである。ただ、最近どの家の蔵も老朽化していることから、備品を保管するとなれば管理責任上、蔵を改築しなければならないという厄介な問題があるために、専用倉庫を希望する声が多く出ている。我々が見学した昭和五十五年の契約総会では専用倉庫建設のための委員会が結成されている。

元契約・大正契約・第三契約では、契約内の、蔵ないし倉庫を所有しているイエが保管しており、元契約・第三契約の場合には備品を保管しているイエに対して契約積立金のなかから毎年賃借料が支払われている。大正契約の場合には賃借料は支払われていない。

次に契約総会であるが、かつてはほとんどの契約が旧暦十月二十日に総会を開催していた（契約が「廿日講」と呼ばれるのもそのためである）。

戦前からあった契約で、大正契約だけは結成時（大正十年）から新暦の十月二十日に総会を開いていたが、残りの七契約はすべて旧暦十月二十日が総会開催日であった（表5参照）。これら七契約のうち、中契約は明治末期すでに新暦十一月二十日に変更し（現在も同じ）、柳町契約は戦後一時新暦十一月二十日に変更したが、その後再び旧暦十月二十日に戻し現在でも旧暦で総会を行っている。残り五契約は、戦後昭和三十年代から四十年代にかけて旧暦から新暦に変更し、期日は十一月初めから、遅くとも十一月二十日になっている。戦後に結成された四つの契約のうち平和契約だけは結成時（昭和三十一年）旧暦十月二十日に開いていたが、昭和四十四年新暦十一月二十日に改められ、また残りの三契約はすべて結成時より新暦で、しかも十月の二十日ないし二十五日と他の諸契約よりも早い時期に期日が設定されている。

一部の契約を除き、戦後多くの契約が総会日を新暦の十一月に変えた理由の一つは、昭和三十年代後半に始まる出稼ぎ世帯の出現にある。第一章でも述べたように、「町部」としてはそれほど出稼ぎ世帯が多いわけではないが、それでも契約加入世帯のなかに何戸かの出稼ぎ者が含まれている。とくに、兼業農家にとっては、出稼ぎは大きな収入源であり、農閑期に入る十一月月中旬より翌年の五月までは、大きな「稼ぎ時」である。また、六ヶ月間出稼ぎに従事すると失業保険給付資格が得られるため、出稼ぎ者は、できるだけ早く出稼ぎに出るようにしている。こうした理由から、出稼ぎ世帯のいる契約は、総会期日を早めるようにしたのである。

総会期日変更のもう一つの理由としては、戦後次第に旧暦にかえて新暦を使用するようになったことがあげられよう。十一月二十日に変更した契約の多くは、出稼ぎの影響よりもむしろ、新暦使用にウエイトがおかれているとみてよい。旧暦十月二十日に近く、しかも期日が「二十日」ということで設定されたもののようである。戦後につくられた平和契約を除く三契約が結成時より新暦を用いているのも同じ理由とみなしてよい（十月中に設定しているのは、多少は出稼ぎの影響でもあるが）。そうしたなかで、（戦後一時新暦で行ってはいるが）依然として旧暦を用いている柳町契約だけは、例外と言えるであろう。

次に契約総会の場所であるが、各契約とも以前は総会当番にあたった組の一軒が輪番で場所を提供していた。しかし、現在では中契約・上河原契約・むつみ契約のみが当番の自宅で総会を開いているだけであって、他の契約ではそれぞれの部落の公民館で総会を開いている。<sup>(5)</sup> 当番宅で順繰りに総会を開いている契約では、中契約の場合を例にとれば、講員数二十四戸であるから二十四年に一回当番を引き受けることになる。当番宅で総会を開いているこれら三契約はいずれも構成員数が二十戸内外の小規模な契約であるためにそれぞれの家で総会が開けるのである。ところが、契約の規模が大きい場合には収容力という点でそれぞれの家で総会を開くことは困難である（とくに、最近の家の造りではその傾向が強い）。もちろんもう一つの背景として、近年、公の会合は公民館で開くようになってきているという点が指摘できよう。

なお、先に触れたように元契約と新契約では本（元）と添という名称が組に付けられており、本組・添組別々の当番宅で総会を開いていたが、これ

は両契約とも構成員が多くて(四十戸)、一同に会せなかったためである。ただ、その際、総会の決議内容が本組と添組で異なることのないように、一方の組から他方の組に使いをだして調整をしていたのである。現在では、両契約とも公民館で全構成員が一同に会して総会を開いているので、こうしたことは行われていない(前述したように、新契約では元・添という名称さえ廃止してしまった)。

前述のように、総会当番は契約の組が担当し、今年度が一組であれば、来年度は二組というように輪番で行う(固定の組のない大正契約は、前述した不幸当番とは別に、屋押して四戸ひと組になり、総会当番を受け持つ)。当番は、総会の前日、契約メンバー全員に翌日総会開催の旨を知らせに歩く。かつては総会当日も「只今使<sup>タイマツカイ</sup>い」といって、集合時刻に遅れないように使<sup>タイマツカイ</sup>いに出向いたそうであるが、現在では各契約ともこれは廃止している。また当番は原則として夫婦二人(夫婦揃って出られない場合はそれにかわる男女)で当り、前日より、女は賄の準備、男は会場の準備を行う。

総会は、午前十一時ないし正午(契約によって異なる―表5参照)から始まり、集合時刻は厳守される。実際に遅刻する人はまずいないが、万が一遅刻した場合には、どの契約でも清酒一升を持参するのが慣例となっている。

総会への出席は、イエを代表する者であれば誰でもよいことになっているが、かつては、戸主でなければならないとか、和服正装で出席しなければならぬとか、かなり厳しい条件を課していた契約もある。

席は口の字形になって、次年度当番が上座に、今年度当番は下座に着き、それ以外の人は左右の列に着席する(写真参照)。三十分から一時間程協議

が行われ、司会は、講の代表者ないしは当番の一人が当ることになっている<sup>(6)</sup>。協議事項の主なもの、決算報告の承認、規約の改正、加入脱退の承認、備品の購入修理、諸経費の改正等である。参考までに、昭和五十年元契約総会での協議事項を掲げておく。

昭和五十年十一月五日

於十日町公民館

十二時 開講

全員出席の上次の通り協議決定する

- 一、前議員柴田初代氏の補充として永山儀造氏が議員となることにつき満場一致賛成決定する
- 二、不幸の際の遺代を本日以降金五百円とする
- 三、昭和五十一年度以降の積立負担金は金三百円を集金すること
- 四、倉庫賃借料は本年度は金三千円とし、昭和五十一年度以降は金五千円とする
- 五、契約当日の賄は従来通りとする
- 六、契約当日の賄は従前通りとするが、当番議員の持出し(野菜等)はしないこととし全部購入し経費は均等割として徴収することとする
- 七、その他の件に関しては従来通りとする

右之通り決議する

魚 豆腐

以上

協議が終了すると今年度当番が上座に着席している次年度当番に酒を注ぎ、「当渡し<sup>トウワタシ</sup>」と呼ばれる引きつきを行う（これに対して、次年度当番は「当受け取り<sup>トウウケトリ</sup>」をすることになるが、今日では「トウワタシ」・「トウウケトリ」の名称はあまり用いられていない）。そのあと、全員で共食が約二時間程行われ、総会当番は他の契約メンバーの接待役をつとめる。総会の献立内容および酒の量は、あらかじめ総会で決められており、それに基づいて持える。献立内容の一例を次に掲げておく（これは元契約添組昭和三十六年の改正内容であるが、当時本組もほぼ同じ内容であり、また本・添組後も、これに準じて作られている——写真参照——）。

昭和三十六年十月廿日改正

#### 献立

- 一、米飯一人二合宛
  - 一、平魚
  - 一、當時有る物を利用の事
  - 一、野菜ひたし
  - 一、きんぴら
  - 田作四〇〇瓦を燥し
  - 一、漬物
  - 一、中置
  - 一、数の子
  - 一、吸物
- なんばん焼味噌にて和える  
ふすべ蕪  
茄子漬  
二切れ  
現在数の子は稀少品にて高価なれば佃煮等を代用しても可

以前は、これら賄に必要な材料の一部を各戸より集めていたこともあるが、現在ではほとんどの契約が現金で（かかった費用を均等割にして）、総会当日徴収している。金額は年度・契約によって多少異なるが、現在では千円から千三百円程度である（表5参照）。なお、総会終了後、当番の人たちだけで共食が行われる。

以上、金山町「町部」にある十二の契約の組織を概観してきたが、どの契約もほぼ似たような組織上の特徴を有しており、また、時間的な変化もおおよそ軌を一にしているといつてよい（細かい点での差異は表5を参照されたい）。結局、いずれの契約も、講員が対等・平等の立場で、権利・義務を共有し合うことを最大の目的としており、それによって不幸時の相互扶助が円滑に行えるように配慮されているのである。

この点について、さらに次章の「契約の機能」を通して補足してみようと思う。（高尾）

### 第三章 契約の機能

前章でも触れたように、本報告で我々が取り上げている金山町「町部」四部落にみられる十二の契約はいずれも、不幸の際の相互扶助を目的とした組織である。したがって、本章でこれから述べようとすることも、契約に加入しているイエに、実際に不幸が生じた場合、これら契約がどのような役割を果すのかという点が中心になる。しかし、この第一部「はじめに」

でも指摘しておいたように、この金山町「町部」四部落の契約のあり方は、金山町を含む最上地方一般にみられる契約講、及び同じ金山町でも、農村部の諸部落にみられる契約講とは、若干特徴を異にする。そうした特徴のいくつかは、前章までに述べてきたが、本章では、その点をさらに補ってみたいと思う。ところで、金山町「町部」の契約の機能を具体的に記述する前に、論旨を進めやすくするために、契約講の機能に関し、多少一般論的なことを述べておきたい。

我々は以前、別な報告において、従来の契約講研究をふまえ、「契約」あるいは「契約講」と名のつく組織は、東北部を中心にかなり広範囲にわたって見出し出され、かつその組織内容及び果している機能も一律でないことを指摘しておいた。<sup>(8)</sup>さらに、同一地域内に、目的を異にしたいくつかの契約講が併存することも珍しくはないため、契約講一般の機能を安易に限定してしまうことは慎しまねばならない。しかしながら、山形県最上地方に関して言えば、「廿日講」と通称され、かつてはムラの戸主たちが旧暦十月二十日に一同に会して講の運営を取り決めていた「戸主契約」とか「村契約」・「本契約」とか呼ばれる契約講の機能については、ほぼ共通した特徴が指摘できる。<sup>(9)</sup>すなわち、その主たる機能は、不幸の際の相互扶助である。後で詳しく述べることになるが、特に遺体の処理——以前から火葬の場合が多かったようであるが、現在のように公営の火葬場がない時分には、自前で火葬しなければならず、かなりの重労働であった。また、土葬の場合でも埋葬には相当の人手を要した——と、弔問客への食事の提供という点で、不幸が生じた場合にはどうしても、多くの人々の援助を仰ぐ必要があるのである。もちろん今日では、遺体の処理に関わる部分での必

要性は、ほとんどなくなっているようであるが、弔問客への食事の提供という部分での必要性は、まだなくなっておらず、その意味で、依然として、不幸の際の相互扶助という目的は生きているのである。

しかし、他方で、こうした「戸主契約」は、それ以外のもう一つの重要な機能として、ムラ全体の運営を司る役目になっている。例えば、入会地の利用、道路・堰等の普請、神社の祭礼の執行、共有財産の維持・管理といった事項がそこに含まれる。<sup>(10)</sup>要するに、最上地方の契約講は、不幸の際の相互扶助を核に据えながら、ムラ運営に関わる諸般の問題を協議するムラ寄合、言い換えれば、ムラの共同体的結合のカナメにあたる組織とみなすことができる。そして、それを支える重要な要素が、契約講への全戸加入という原則である。新たに分家したり、新しくムラ入りしたイエに対する一定の加入制限がみられる場合もあるが、原則はあくまで、一部落一契約の全戸加入である。そうでなければ、右に述べたようなムラ寄合としての機能は維持できないからである。

ところで、同様のことは、金山町農村部の契約講においても指摘することができ。我々の今回の実地調査は、「町部」四部落に限られたが、「町部」にある諸契約の歴史の変遷、ならびに、現在の際立った特徴を明確にする意図のもとに、我々は「町部」四部落の調査と併行して、農村部全二十七部落の契約講に関してアンケート調査を試みた。我々の準備不足と時間的制約のために、回収できたのは十二部落（回収率四十四％）だけだったが、寄せられた回答を見る限り、金山町農村部諸部落の契約講は、一部落一契約の全戸加入であり、年次総会（「廿日講」）は、葬式に関する取り決めの他に、年間の諸行事、部落役員の選挙、神社や公民館の管理、



ムラの規約（Ⅱ掟）の改正及び再確認等の協議を行う場であることがわかるのである。<sup>(1)</sup>つまり、金山町農村部にみられる契約講は、最上地方の契約講一般にみられる機能上の特徴を有しているのである。

さて、右の説明をふまえて、金山町「町部」の諸契約講を検討してみると、どういふことになるであろうか。とりあえず結論だけを言っておくと、「町部」の契約は契約講のもつ不幸時の相互扶助機能のみを有し、部落（ムラ）の共同体的結合をはかるムラ寄合としての側面は、ほぼ完全に捨象させてしまっているということである。当然その背景には、「町部」だけが有する種々の要因が存在しているわけであるが、その分析は、次章の総括で行うことにしたい。ここではまず、「町部」の諸契約が具体的にいかん機能しているかを述べることにする。

契約に加入しているイエのどこかに不幸が生じると、そのイエが属している組の各イエにその旨が伝えられ、各イエから原則として戸主ないしは、それにかわる男性が不幸宅に参集する。前章で述べたように、十二の契約のうち、大正契約以外はすべて、講員は、いくつかに分けられた組のいずれかに属している。したがって、自分が所属している組のメンバー宅に不幸が生じた場合、不幸宅を除いた残りの講員が、不幸当番を担当することになるわけである。固定した組のない大正契約の場合は、その都度、屋押し順番で決められたイエが不幸当番を受け持つ。不幸当番の仕事はいくつかあるが、以前と現在とはかなり大きく変わっている。まず第一は、不幸が生じたことを、自分の契約の全講員、不幸宅の親類・縁者に知らせて歩く「シラセ（知らせ）」の仕事である。二人一組になって、伝えに行ける範囲の家々を回る。かつては、新庄あたりまでシラセに赴いたそうである

が、現在では、ほぼ四部落内に限られ、あとは電話で連絡をするようになっていたことである。電話の普及によって、不幸当番の仕事はずい分と軽減されたのである。また、不幸当番は、講が所有している仏具・膳碗等を、保管場所より不幸宅へ運びこむ仕事を受け持つ。前章で述べたように、いずれの契約も屏風・鐘・飾台・十三仏を描いた掛軸等、葬儀に必要な仏具一式及び二十人前から四十人前の膳碗一式その他を、講員宅の蔵や、専用倉庫に所有・保管しており（表5の「備品」の項参照）、出し入れの前には、紛失・破損等の有無を確認するのが原則になっている。

さらに、不幸当番の仕事として、「ワラ代」金の徴収ということがある。これは、現在のように町営の火葬場がなかった頃、火葬を自前で行っていた当時のなごりとみなすことのできる慣習である。金山町に町営の火葬場が建てられ、使用され始めたのは昭和四十二年一月一日からである。それ以前は、所定の焼場にワラを持ち寄り、ほぼ一晩かけて遺体を焼いたそうである。聞くところによると、これは、かなり大変な作業だったようで、棺を置く台をつくり、その下にワラを積み重ねて火を入れる。雨や雪が降っている時は思うようにワラが燃えず苦労したという。ただ、この作業の大半は、後述する「野若勢<sup>ノワカゼ</sup>」の仕事であり、またワラに火を入れて以後の仕事は、不幸宅の親類の者たちが行うのが一般的だったそうで、不幸当番の仕事は、この火葬に使用するワラを各講員宅より徴収することであった（契約によっては、講員が各自焼場までワラを持参する場合もあった。その時はその旨を伝えて歩くのが不幸当番の仕事であった）。ワラは、不幸宅を除く、全講員より徴収され、集めるワラの量は、各契約の構成員数の多少によって、契約ごとに違いがあった（最も新しいむつみ契約だけは、ワ

ラを集めていなかった。講員に農家がほとんどなかったため、ワラを購入する費用として現金を集めていた。なお、各契約のワラの量は表5参照)。この金山町一帯ではワラ六把<sup>ソク</sup>で一束、十束まとめたものを一コロと数えるのが一般的であるが、火葬用に差し出す場合は、十束なくとも一コロと呼んでいたようである。どの契約でも、不幸の時はワラ一コロ持ち寄ったものなどの返答なので、量の多少に関係なく、差し出すワラはすべて、一コロで数えたものと考えられる。しかし、このワラの徴収も、火葬場完成後はすべての契約で廃止され、それにかわって「おくやみ代」の名目で現金を各講員より集め、不幸宅に渡すように改められたのである。「ワラ代」と呼ばれるのも右のような所以からである。徴収額は、時とともに変化してきているが、最近では、一番少ない契約で五十円(内町契約)、多い契約で千円(中契約)とかなり開きがある。またワラ代金を廃止した契約もあり(平和契約)、むつみ契約の場合は特にワラ代金を集めず、年間積立金より講全体で不幸宅へ三千円差し出すことにしている。

最後にもう一つ、やはり現在ではなくなった不幸当番の仕事として、お棺、お棺を担ぐ棺台、野辺送りに用いるノボリ・蓮華等の「ダミ細工」の作成があった。しかし、火葬場ができてから、野辺送りは廃止されたし、またお棺等は、葬儀屋が用意してくれるので、こうした作業は必要がなくなってしまったのである。

そういうわけで、現在の不幸当番の仕事は、以前に比べると大幅に減少し、かつては丸々一日かかったものが、今では半日で用が足りるような状況に変わってきているのである。

さて、次に不幸当番以外の仕事であるが、とりあえず先程触れた「野若

勢」について述べておこう(契約によって、「野若衆<sup>ノワカシニョウ</sup>」、「野若連<sup>ノワカシヅ</sup>」等呼び方が異なっているが、当番内容は同じである)。これも、火葬場建設以前にあったもので、現在ではなくなっている。「野若勢」というのは、出棺以後、火葬のワラに火を入れるまでの仕事を受け持つ人々のことである。これには、不幸当番を除いた全講員が当るのが一般的であるが、なかには不幸当番を含む契約もある(上河原・平和・新生の三契約)。

この仕事は力仕事なので、当番は男でなければならず、したがって都合がつかず、自分のイエから男手を出せない場合には、代理として親類・知人に代ってもらうのが一般的であった。ただ、代理を出せないような場合には、「ツブシ(潰シ)」と呼ばれる迷惑料にあたるものを現金で支払って、仕事を免除してもらうことができた。例外的に中契約と大正契約だけは「ツブシ」を一切認めていなかった。中契約の場合は、後述するように、代理として出せる使用人等をかかえるイエが多かったためであり、大正契約は講員数が少なかったため「ツブシ」を認める余裕がなかったのである。

「ツブシ」代もまた時代によって変化しているが、大体、その時々の男一人の日当の半額から全額に相当する額になっていたようである(詳しくは表5参照)。もちろん、この「ツブシ」も「野若勢」の廃止とともになくなった。

話を「蒸シ番<sup>フカシバン</sup>」に移そう。これは今でも昔どおり機能している役割分担である。「蒸シ番」というのは、弔問客に出す食事の準備をする人たちのことであり、仕事の内容からして、これは女性たちが当ることになっている。ただし十二契約中、中契約では以前から、この制度はなく、また新契約では、昭和四十七年に廃止している。中契約の場合は、構成員の多くが、金

山町の中でも経済的にかなり裕福な層に属している（いた）ために、自らのイエ内に入りする使用人等も多く、そうした人々の手伝いで、食事の準備がなんとかまかなえる（た）のである。でも、最近是不都合を感じているとみえ、中契約の中でも最も裕福なイエとみなされている「親方衆」の間で昭和四十四年から、「蒸シ番」にあたる関係を結んでいた<sup>(13)</sup>、また契約は中契約に加入していながら、「蒸シ番」だけは七日町契約に加えてもらっているイエが四軒あったりで、「蒸シ番」制度のない不便さを、それぞれに解決している状況なのである。

一方、新契約の場合は、近年弔問客に出す赤飯の量が以前ほど要らなくなったために、「いっそのこと、とりやめよう」ということになり、廃止したとのことである。そのかわり現金で出すことにし、新契約のワラ代金<sup>ワラ</sup>が他の契約に比べて高いのも、この中に「蒸シ代」も含めていいるからである（因に、「蒸シ番」のない中契約のワラ代金も高額である）。もちろん、「お客が以前ほど赤飯を食べなくなった」という声は、他の契約でも聞かれ、最近では集めた餅米の一部だけを調理して、残りは米のまま不幸宅に渡す例が増えているそうである。前述した中契約をめぐる状況とは逆の方向にあるといえる。それでも「町部」の契約全体としてみれば、この「蒸シ番」の必要性は後述する「重の内」<sup>ジエウノウチ</sup>と並んで、まだまだ大きいとみなしてよい。この問題については、次章で再度触れることにする。

「蒸シ番」の分担であるが、これは数軒ずつ屋押しでまわる方式をとっている契約と、第二章および、不幸当番の項でも述べた、契約を構成する各組が順番で受け持つ方式をとっている契約とに大きく分けられる。前者の方式を採用しているのが元・七日町・大正・第三、後者の方式を採用し

ているのが内町・柳町・上河原・稻・新生・むつみの各契約である。屋押し方式をとっている契約のうち大正契約だけは、前述したようにもともと固定した組がないため、不幸当番も、この「蒸シ番」も（そして前章で述べた総会当番も）、屋押しで回るわけであるが、残りの三契約は「蒸シ番」だけ組とは別の屋押し順を決めている。また後者の方式を採用している六契約のうち、内町契約だけは一組と二組、三組と四組をひとまとめにして交互に当番を担当することになっている。

さて、この「蒸シ番」に当たった人々は、炊事を行う家を決めて、（最近では、公民館で行う場合もある）葬式当日そこに集合し、主食の赤飯を蒸し、煮物や香の物を用意する。必要な材料と経費は、不幸宅を除く各イエから徴収してまわる（元契約はすべて「蒸シ番」の持ち出しにしており、各イエから集めることはしない）。モチ米五合から一升（各契約によって異なる。詳しくは表5参照）と、アズキ、それにジャガイモ・ニンジン・ゴボウ等の野菜類、漬物、それに現金（百円から二百円程度——これも表5参照——）である。購入するものは、トウフ・厚揚げなどの各イエでまかなえないものと、調味料である。赤飯は、かつては、自分たちで蒸していたが、今は町内にある専門の蒸し屋に頼むこともでき、どちらにするかは、その都度、当番の人たちが判断して決めている。また、蒸す量も前述したように、最近では以前に比べて少なくなり、不幸宅からの要請で、集めたモチ米の半分だけを赤飯にして、残りは米のまま、不幸宅に渡すようなことも多いという。こうして用意した赤飯等は、不幸宅に運ばれて、会葬者に供される。

ところで、「蒸シ番」の人たちの仕事は、葬式当日の煮炊きだけであっ

て、それ以外の日の食事は、不幸宅で用意するのが原則である。しかし、この金山町一帯では、死者が出ると、葬式当日だけでなく、「灰<sup>ハイ</sup>寄せ」(これは火葬後、お骨上げした後で、近しい親類・縁者を集めて行う共食供養である。火葬を自前で行っていた当時は、葬式の翌日、今は、葬式の当夜行われるのが普通である)を初めとして、約一週間にわたり、弔問客が絶えない程に、かなり派手な死者の弔いが行われている。そのため、不幸宅でその都度、食事をこしらえているわけにもいかず、それを助ける役目を果しているのが、「重の内」と呼ばれるシンルイ関係である。これは、契約講の機能とは直接関係のないものであるが、この地域の、不幸の際の人間関係を知る上で、またシンルイづきあいの特徴を知る上で重要な意味を有していると思われるので、ここで簡単に触れておきたい。<sup>(14)</sup>「重の内」は、不幸が生じた場合、不幸宅に赤飯と、重箱に詰めた煮物・漬物その他(場合によって、煮メなどを鍋ごと)を持参する関係にあるシンルイのことである(赤飯を入れる櫃と重箱については写真参照)。ただし、この場合のシンルイとは、必ずしも血縁・姻戚関係にあるイエのみを指すのではなく、「シンルイヅキアイ」をしているイエも「重の内」関係に含まれることがある。例えば仕事関係の番頭とか弟子筋にあたっているイエなどである。そして、「町部」の「重の内」関係を決定する最も重要な条件は、同じ「町部」四部落に居住しているということである。死者から見て等距離にある「シンルイ」であっても、遠方に住んでいる場合、「重の内」には入らないのが一般的である。つまり、これは赤飯・重箱を簡単に持つてくることのできる範囲に住んでいなければ「重の内」関係にはなりにくいということを示している。実際、車の普及した今日ならまだしも、一昔前ま

では農村部や新庄あたりからでも、赤飯・重箱を運んでくることは、大変なことであつたと考えられる。

したがって、「町部」四部落を中心に「重の内」関係ができあがるのはごく当然であつたのである。

さらに、「重の内」関係にもランクがあつて、大きくは「蒸シ(赤飯)五升・重五階」と「蒸シ(赤飯)三升・重三階」の二ランクに分れている。もちろんその他にも「蒸シ一斗・重五階」とか「重二階」だけといったものもあるが、むしろ例外的である。五と三という数の重視、及び、赤飯五升の時は、重箱も五つといった同数の一種語呂合せ的特徴が指摘できるが、この地域のみが有する何か特別な意味はなさそうである。また、我々の調査が不十分なせいもあるが、この二つのランクづけと「シンルイ」関係の疎密との間には、特別のきまりは見い出せなかった。兄弟同士でありながら、「五升・五階」のイエもあれば、「三升・三階」のイエもあるという具合なのである。おそらくは、日頃の「シンルイヅキアイ」の度合によつて、自然に決定されてくるものであるうと推測される。もちろん、今後もう少し多くの事例にあたってみれば、親族理論上の何らかの法則性が見えてくる可能性がないわけでもないが、今は、とりあえず右のように述べておくにとどめる。

また、この「重の内」関係は、互酬の関係であるという点も重視しておく必要がある。つまり、自分のイエの不幸の際「五升・五階」もらったイエで不幸が生じた場合には、やはり「五升・五階」を返し、「三升・三階」もらったイエには「三升・三階」を返すわけである。したがって、各イエで保管している「香典帳」には、その旨が克明に記録してあり、相手

方に礼を失することのないようにしている。我々が調査させてもらった際も、この「香典帳」を頼りに、「重の内」関係を教示して頂いたわけである。ただ、こうした互酬的關係も永久に続くものではなく、当然ある時点で、「重の内」関係をきるイエもでてくるわけである。我々が聞いたある事例ではどちらかのイエが「この次からは、フカシ重箱結構ですから」というような言い方で、「重の内」関係解消をほめかし、「それでは現金で」といった受け答えをして了解することになるそうである。

シシルイとしての疎密關係の時間的な変化が絶えず生じるわけだから、これは別に不思議なことではない。それぞれのイエによって、「重の内」関係を結んでいるイエの数には、かなりの差があり、少ないものでは二、三軒、多いイエになると二十軒近い「重の内」をもっている。概して、何代も続く古いイエほど数が多く、最近分家したようなイエほど、数が少ない。これも当然とすべきだろう。

最後に、右に述べた「重の内」解消の際の言い回しにもみられることであるが、近年、「重の内」関係にあるイエであっても、「重の内」料として現金でやりとりする場合が増えている点を指摘しておこう。すなわち、不幸が生じた際、相手方と話し合いを行って、蒸し・重箱にするか現金にするか、決めるのだそうである。これは先に「蒸シ番」でも述べたように、最近では以前ほど、食事の量も要らなくなったため、蒸しや重箱をもらいすぎてもあますことのないようにとの配慮から出たものである。こうした傾向は今後も続いていくことであろうが、弔問客に食事を出すという慣習がなくなるか、あるいは弔いそのものを簡素化するといった動きが生まれない限り、基本的に「重の内」関係がなくなるといことは起らないよう

に思われる。

いずれにしても、この金山町一帯（アンケート調査から農村村部においても、「町部」同様「重の内」関係が存在することを確認している）では、今日なお、「重の内」が不幸時の相互扶助機能の重要な一環になっていることがわかるのである。

以上の説明から、本章冒頭に述べたように、金山町「町部」四部落の契約講が、不幸時の相互扶助機能を果していることが、ほぼ明らかになったことと思われる。しかし、同時に、我々が調査した限りでは、「町部」十二の契約のいずれからも、それ以外の機能を見いだすことはできなかったということも、強調しておかなければならない。つまり、金山町農村村部をも含めた、最上地方一般にみられる契約講が、確かに不幸時の相互扶助を中核にしながらも、他方で、ムラ寄合としての機能を果している事実に照らし合わせると、この「町部」の契約講は、その中核の部分だけを「残存」させた形態だと言わざるを得ない。我々としては、不幸時の相互扶助以外の機能を探し求めて、種々の聞き取りを行ってはみたのであるが、「契約仲間同士が特に親しい関係にあるということはないか」「不幸時以外の困窮時―例えば、金銭の貸借―に助け合うことはないか」等の質問は、すべて空振りに終わった。ムラ寄合的な機能も、行政的につくられている町内会の班（十軒ほどで構成されている）が部分的に受け持っていて契約の仕事ではない――これは前章「契約の組織」でも述べたように、現在の契約が、部落にまたがって組織されている以上、もともと無理な話である。したがって、我々としては、とりあえず「町部」四部落の契約は、今日知り得る限り、不幸時のみ機能する組織であると断定しておくことにする。（芳賀）

#### 第四章 総括

この「総括」で述べるべきことのあらましは、前章までにほぼ述べてきたつもりである。したがってここでは、第一部「はじめに」で予め提起しておいた基本的見通しを受けて、金山町「町部」四部落の契約講の特徴を整理しなおす形をとりながら、いくつかの問題点を指摘してみたい。

まず、金山町「町部」四部落には、現在合計十二の契約講が存在し、かつそのうちの九契約が、二つ四部落にまたがって組織されている点を取りあげなければならない。一部落一契約という、最上地方一般の原則から言えば、これはきわめて特異な現象と言わざるを得ないからである。しかし、これも金山町「町部」の成立に関する歴史的経緯（「はじめに」で指摘しておいた）、ならびに現状を見れば、納得のいかないことではない。第一章でも述べたように、この「町部」四部落の場合、「部落」といっても、農村部にみられるような形で、明確に一部落を他部落から区別することは不可能である。「分布図」を見ていただければわかるように、部落の境界線は単に便宜的なものでしかない。川向こうにある羽場部落にしても、地図上でははっきり区別できるけれども、実際に歩いてみると一続きの「町」という印象が強いのである。要するに、四部落は景観上一つの「町」を構成し、中心を走る道路沿いには商店が軒をつらね、その背後には住宅がびっしりと立ち並んでいるのである。むしろ、四つの各部落は都市部の「丁目」にあたるようなものと理解した方がよいかもしれない。そのことは、住民の意識にも反映され、少なくとも今日でみる限り部落主義的な感情が入り込む余地は少ないと言ってよいだろう。

したがって、その結果が契約の組織上の特徴となってあらわれているとみなすことに、問題点はなからうと思われる。第二章で述べたように、いずれの契約でも、四部落内での住居移転は契約脱退の条件になっていないからである。

ただ、どの契約も構成員の分布をみると、いずれかの部落にウエイトがおかれている（平和契約のみは、十日町と羽場各十五戸で同じウエイトであるが――表4参照）点には注目しておかなければならない。構成員が部落間にまたがる九契約のうち、中契約と平和契約の二契約を除いた残りの七契約は、成立当初同一部落内のイエだけで構成されていたからである（十日町と羽場は昭和二十六年まで一つの部落であったことを思い出してほしい）。現在分散しているのはその後の移転によるものである。ということでは、この「町部」においても、契約成立時には構成員を同一部落内に限定していたとみなすことができる（例外的な二つの契約については後程触れる）。

この点は、現在の「町部」の契約が不幸時の相互扶助だけを目的にしていると断定した前章の結論ともかわる重要なポイントなので、少し詳しく検討してみたい。第一章でも述べたように、全十二契約中、元、中、七日町、内町の四契約は江戸期から存在したことが、現存する記録によって確認または推測される。しかも明治五年の壬申戸籍との照合によって、明治初期の「町部」の戸数と、前記四契約の構成員総数がほぼ一致し、当時は「町部」のすべてのイエが、四契約のいずれかに加入していたことがわかるのである。なかでも、元、七日町、内町の三契約は、先程述べたこととも合わせ考えるなら、それぞれ十日町、七日町、内町の部落員だけから

構成されていたことは間違いない。すなわち、いまとりあえず中契約に加入していたイエを除外して考えると、「一部落一契約で全戸加入」という契約講本来の姿をそこから読みとることが可能になるのである。元契約が、別名「十日町契約」と呼ばれてきたいきさつも充分納得がいくことになり、金山町農村部に一般的な部落名と契約名の一致という原則（アンケート調査の回答による）にも見合うものである。

この点をさらに敷衍するならば、おそらくこの三契約の成立時には、その機能も決して不幸時の相互扶助だけに限定されるものでなく、ムラ寄合的な意味を多分に有していたであろうと想像される。それが、いつの頃からか、不幸時の機能だけになってしまったのである。その具体的な時期は、我々には推測しかねるが、現存する江戸後期～末期の記録からは、ムラ寄合的な記述が見い出せないところを見ると、江戸前期かさらに遡る時期ということになるか。さらに、そうした変化の理由も我々の推測の及ぶところではない。おそらくは、城下町・宿場町として非農村的な性格を身につけていた、この「町部」の発展の経緯に由来するものであろう。

そして、ここに先程除外した中契約のもつ独特な性格の根拠も求められるような気がする。第二章及び前章で述べたように、この中契約の構成員は金山町の中でも、経済的にかなり裕福な（あるいはかつて裕福であった）イエが多い。「親方衆」と呼ばれてきた人々のほとんどが、この中契約に加入していることにもその一面は表れているよう。中契約明治二十年の記録に「此契約ハ寛永五年中組定元禄年中修正シタル古帳式冊明治十九年迄議定書添保存ノ処……」とあるのを見ると、中契約の成立は江戸初期（寛永五年＝一六二八年）であることは間違いないが、おそらくこの契約は従来

からあった前記三つの契約（ということとは、この三契約の成立は江戸期以前であるという推測が可能になる）には入れなかった（あるいは、入らなかった）、十日町と七日町に居住する特定のイエ筋の人々が集まってつくったものではないかと考えられる。

つまり、何らかの事情によって、一部落一契約という慣例を破り、二つの部落にまたがった、しかも「蒸シ番」などを必要としないような契約がつくられたと考えざるを得ない。<sup>(15)</sup> 彼らが何故、従来からあった契約に入れなかったのか、あるいは入らなかったのかは、これまたはっきりはわからないが、特定の富裕層であったとすれば「入らなかった」線が強いし、「入れなかった」とすれば、それは一契約が抱え得る講員数の限度によるものと考えられる。後述する明治以降の新しい契約成立にもかかわることなのであるが、一契約が最大容し得るメンバー数は、どうやら四十戸といったところである。十二契約中、最大のものが四十戸であり、聞き取りによれば、「廿日講」開催時の人数、保管しうる膳碗等の数からいって、四十戸が構成員数としては限界だとのことである。そうすると、当時内町契約は少なかった（現在四十戸だが、明治年間には二十戸前後であったらしい）つまり、当時戸数がそれしかなかった）としても、元契約（＝十日町契約）と七日町契約は、ほぼ限度ぎりぎりのところだったという予測も可能である（明治初年には、両契約とも限界に達していた）。「入らなかった」にしろ「入れなかった」にしろ、とにかく中契約は江戸期より、特殊な発展をしたこの「町部」が必然的に生み出した「例外」とみなすことができそうである。

しかし、この「例外」は一つだけに終らなかった。その後、明治年間以

降「町部」の人口・世帯数は増加し続け、契約に加入していない（＝加入できない）イエがかなりの数に達することになる。そこで想起してほしいのが、この金山町一帯の遺体の処理の大変さ、及び弔い儀礼の派手さという要因である。この点は、前記中契約成立の条件にも加えられて然るべきものであるが、今日とは異なり不幸時の人手の確保は、何にもまして重要な要件であった。かくして、「町部」の世帯数の増加に対応する形で次々と新しい契約がつけられてきたことは、第一章で述べたとおりである。ただ、その際も中契約のような部落にまたがった契約の成立は、戦後にできた平和契約のみで、他はすべて同一部落の成員によるものである（平和契約にしても、かつては同じ部落だった十日町と羽場のイエだけで結成されたのであり——七日町の二戸はその後の移転——、しかも羽場独立後間もなく結成された点を考えるなら、二部落にまたがっているという指摘は適切でないかもしれない）。ここに、やはりかつての部落内契約のなごりをみるべきなのかもしれない。もちろん、もう一つの新しい要因として「近くに住む困っているものの助け合い」といった側面も見逃せない。戦後成立した四つの契約などは、そうした性格が強いようにも思われる。

さて、昭和三十三年に成立した新生契約、むつみ契約を最後に、「町部」四部落に新しい契約は生れていない。それと歩調を合わせ、かつ世帯数の増加と相まって、この「町部」内には、いずれの契約にも加入しない世帯が急激に増えてきた。これにはいくつかの要因が指摘できるだろう。まず、現在では不幸が出ては葬儀屋が万端整えてくれるので、契約の仕事、特に不幸当番などには必要ないし（「シラセ」にしても電話で充分事足りる）、また仏具等についても必要性を感じない。そして、もちろんその背後にある

要因として、すでに述べた昭和四十二年一月一日よりの町営火葬場の使用開始ということも忘れてはならないだろう。第二に、昔からの古いイエならともかく、新しいイエほど葬式を簡素にすまそうとする傾向が強いということである。これは「重の内」の数などに顕著に表れている。第三に、新しいイエそのものが、当面葬式を出さねばならないような状況におかれていないということである。つまり、老人のいないイエの増加が、「町部」の世帯数増加の主体になっているということである。

しかし、こうした契約非加入世帯の増加という現象が顕著にみられる一方で、従来からある契約のいずれにも「契約を解散しよう」という動きが全く見られず、なかには、「契約のメンバーに空きができたら加入させてほしい」と頼み込むイエもあるという現実が存在する。契約がになう不幸時の種々の相互扶助機能が部分的に停止あるいは稀薄化しつつあるにしても、我々が調査した限りでは、「契約があるために心強い」と唱える人がほとんどであった。特に、祝い事と違って、人の不幸は突然襲ってくることも多く、不幸宅が必要とすれば葬式当日は、外回りの仕事から食事の用意まですべて契約でやつてもらえるという安心感がある。弔問客の多く集まるイエほど、そのメリットは大きいであろう。前章でも述べたように、この金山町は弔い儀礼の派手な土地柄である。以前は契約の必要をあまり感じていなかったイエでも、何らかの社会的地位を獲得することによって、万が一不幸が生じた際の「保険」として、新たに契約に入りたいと思うようになっても不思議ではない要因が潜んでいる。ただ、仲間をつのって新しい契約を結成しようとまでいかないと、先程述べた今日的情況が影を落しているとみてよい。言ってみれば、現在の「町部」は、一方で契



約を必要とする人が顕在的にも潜在的にも存在し、他方で契約の必要性を感じなかったり、あるいは契約の機能を契約以外に求める人が増加しているといった、二つのベクトルが半ば均衡するような状況下にあるということになろう。今後しばらくは、こうした状況が続いていくものと思われる。

第一部「はじめに」でも述べたように、我々は意図して、この金山町「町部」の契約講調査を始めたわけではなかった。きわめて偶然的な理由から、いわゆる農村部とは異なった「部落」に入り込んでしまったわけである。結果として、一度に十二の部落の契約を扱うような煩わしさがあって、必ずしも思いどおりに調査検討が進められたとは言い切れない。ただ、各契約の共通点と相違点とを整理する過程で、前述したような「町部」の変遷の姿が多少は明らかになったように思う。契約講を通じて村落構造論にアプローチするというテーマも確かに重要ではあるが、契約講研究が従来とは多少異なった視角から取り上げられてもよいのではないかというのが執筆者の抱いた感想である。(芳賀)

注

(1) 前記情報とは別に、我々は、岸和子「契約について——山形県最上郡金山町——」相模民俗学会『民俗』五十九、三〇七頁、一九六五年のなかで、金山町の契約が紹介されている事実は知っていた(高橋統一他「契約講の社会人類学的研究 I——山形県西置賜郡小国町市野々・大石沢の事例——」『社会人類学年報 Vol. 1』弘文堂、一九七八年でも引用しておいた)。右の報告において、岸和子氏は(調査の過程で、我々は同氏が金山町の十日町出身であることを知った)、確かに、金山町には、全部で十二、三の契約がある事実を指摘し、それら名

称のいくつかを列挙しておられる。また、特に「新契約」「中契約」「第三契約」の三契約を取り上げ、詳しく紹介されている。しかしながら、同報告ではこれらの契約が金山町のどの部落のものなのかについては、一切触れていないため、当初羽場部落を調査しようとしていた我々は、この報告をあまり重視していなかった。我々が迂闊だった点は素直に反省したい。ただ、その後の我々の調査に基づけば、岸氏の報告には随所に事実誤認や曖昧な記述がみられ、資料として積極的に評価しにくい部分もある。それでも、同報告は、後述するように町営火葬場建設以前の契約の様子を扱っているため、当時の姿を知るには参考になる。

(2) 山形県の出稼ぎの実態については、山下雄三『出稼ぎの社会学』国書刊行会、一九七八年を参照されたい。

(3) 戦前に関しては、「町部」の世帯数の変遷を知る手がかりが全く得られないため、新しく契約が結成された当時の状況を具体的に描き出すことはきわめて困難である。全世帯数に対する契約加入世帯の割合を算出できないのが、最大の難点である。

(4) このうち、七日町・柳町・新生の三契約は共同倉庫を建設して備品を保管している。備品の管理は各契約の総会当番が担当している。

(5) 表5にも記したように、当番宅で総会を開いている三契約のなかでも、中契約は昭和五十五年の総会を十日町公民館で行っているし、むつみ契約はどこかの温泉で開く場合もあるそうである。また、大正契約も、昭和五十年までは当番宅で開いていたが、昭和五十一年からは親睦を深める意味も込めて、温泉で総会を行っている(ただし、温泉で行うことがきまりになっているわけではない)。

(6) 上河原契約・新生契約・むつみ契約では、契約内に「運営委員会」があり、議員の互選で選ばれる代表者一名と運営委員(上河原契約三名、新生契約五名、むつみ契約六名)から成る。この運営委員会が、総会に先だって協議事項をとりまとめ、それに基づいて総会は進められる。三契約とも戦後にできた契約であるため、こうした新しいスタイルを採用したものと思われる。

(7) 柳町契約は昭和四十五年より、七日町契約は昭和四十九年より、賄を廃止して仕出屋より折詰をとるようにしている。また、近年温泉で総会を行っている大正契約も、当然賄はやっていない。

(8) 前掲、高橋統一他『契約講の社会人類学的研究Ⅰ』

(9) 大友義助「山形県最上地方における契約講について」『農村文化』編集委員会編『農村文化論集』第二集 農村文化研究所(米沢市)、一九八〇、四十五頁及び五十三頁。

(10) 同右、四十五頁及び五十四頁。

(11) アンケートの内容は、契約講の有無、組織内容、機能、総会の運営等、我々が「町部」四部落の契約に関行った実地調査と同様のものである。当初の計画では、このアンケート結果をもとにいくつかの部落で、実際の聞き取り調査を行う予定であったが、時間的余裕がなく、今回は断念せざるを得なかった。回収できた分についても、必ずしも我々の満足のいく回答結果ではなかったため、本報告では我々の論旨を展開する上で必要な部分のみの参照にとどめることにした。アンケート項目全体にわたっての回答結果の検討は、実際の聞き取り調査の実施とあわせて、他日を期したいと思う。なお、アンケート実施の結果気がついた点があるので一つ付け加えておく。我々が回答を依頼した部落(全部で二十七)は、役場が行政上「部落」とみなしているものであつた。念上は、大字にあたるものである。ところが、いくつかの「大字部落」は戸数が多かったり、集落が二・三ヶ所に分散している。ため、二・三の「小字部落」に分れていて、契約講との関連で言えは、この「小字部落」が一つの契約単位になっている場合があるというのである。したがって、一部落一契約という場合の「部落」の範囲には注意を払う必要がある。

(12) 原則として、の契約も七才以上の者が死亡した場合に講員が手伝うきまりになっている。

(13) 十日町の中に(一部七日町を含む)、金山町の中でも特に裕福であるとみなされている人々が住んでいる一角がある。全部で七・八軒ほどあり、その多くが大きな山林を所有しているといわれる(この金山町一帯は秋田県と隣り合っていて「秋田スギ」の主要な産地になっている。周辺の山には、整然と植林された美しい杉林が続いている)。これらの人々は、町内で通称「親方衆」と呼ばれ、ほとんどが分家・姻戚関係で結ばれている。町の要職に就いている者も多い。そして、この「親方衆」の多くが中契約に加入しており(中契約以外の契約に加入している「親方衆」もある)、中契約自体が「親方衆」とは呼ばれていなくても経済的に裕福であるか、あるいはかつて裕福であった層のイエから

構成されている。「親方衆」をはじめとして中契約の構成員の多くが、いつ頃からそうした位置を占めるようになったのか、我々の調査では明らかにできなかったが、この「町部」及び金山町全体の歴史の変遷を考察する上で興味のある問題ではある。なお、本文で述べた「親方衆」同士で結んでいる「蒸シ番」関係というのは、中契約以外の契約に入っている「親方衆」も含めて、全部で六軒でつくられているものである。

(14) この「重の内」についても、時間的余裕がなく、我々の満足のゆくような調査結果を引き出すことはできなかった。本来なら、典型的な「重の内」関係図を例示して説明したかったのであるが、今回は間に合わなかった。これも他日を期したいと思う。

(15) 中契約のメンバーが、同契約結成当時十日町と七日町の両部落にまたがっていたという点をあえて強調するつもりはない。というのは、中契約全二十四戸のうち、現在七日町に居住する七戸が江戸期より七日町に住居を構えていたという確証がないからである。結成以後の移転及び新規加入によって現在のような構成になっているにすぎないかもしれない。したがって、本来は十日町居住者だけで結成されたという可能性も充分に考えられる。その際は、同じ十日町に成立した元契約との関係が特に問題とされなければならないだろう。同じ部落に二つの契約が存在したとすれば、やはり一部落一契約という前提に抵触することになる。同時に、元契約と中契約の成立に関する前後関係もあらためて問わなければならない。いずれにしても、この点についての我々の調査・検討はまだまだ不十分である。今回はとりあえず、本文に述べたような推測にしておく。

## 第二部 最上郡大蔵村赤松の事例

### 第一章 調査地の概況

山形盆地を流れ下った最上川は庄内平野に出る前に、最上地方の地峡を

通る。赤松の付近では葉山より流れる赤松川と、月山より流れる銅山川（烏川）と最上川が合流している。赤松川と銅山川はいずれも険しい谷を流れ下り、河口付近でようやく低地、段丘上の平坦地をもつ。川の水量が増せば、容赦なく低地の水田に水は氾濫する。赤松の集落は幕末期には赤松川河口平地の東側、台地際にその中心があり、台地上（宮岡）に若干の家が進出していた。幕末期のものと推定されている村絵図面では台地上も耕地に一部利用されていたことがわかる。明治二十四年に台地上で大規模な堰疏水開削工事が行なわれ、それまで雑木林、栗林、草原であった所にも水田が拓かれた。その後、次々と台地上に家が進出した。大まかに台地上を宮岡、台地下を赤松、あるいは下村と呼び分ける習慣も、赤松と呼ぶのはより古い時代の名残り、下村と呼ぶのは新しい現象と分けて理解されよう。台地上では南側の赤松山寄りの場所に多くの家が建てられたが、赤松山はしばしば崩れ、とくに昭和四十九年四月の「赤松山崩れ災害」では死者十七名、重軽傷十六名、住家全壊二十棟などという大被害があったので、県では危険区域を指定し、そこから北側や東側へ多数が移転した。およそ九十年の間に、赤松では大規模な集落内移転を二回は経験したわけである。最近の移動の結果、雪対策の新しい配慮の加えられた個性的な家屋群が出現しているので、一見都市近郊のような景観である。

地区内を県道畑・大石田線が通り、最上川岸の隣接集落烏川を始発点とするバス便は地区内五カ所のバス停を通り、大蔵村役場所在地の清水まで約十分、最上郡中心地の新庄まで約四十五分をかけて一日に七往復している。銅山川を渡り白須賀まで二キロを歩けば、肘折温泉方面からのバス便も利用できる。増水のため、清水との間の道路が浸冠することがある。

徳川時代は新庄藩（戸沢氏）舟形郷代官の支配下に赤松村があった。この旧赤松村は赤松を本郷とし、烏川、升玉を枝郷に含んでいた。升玉は銅山川筋にあり離れた集落である。旧赤松村の庄屋を赤松の八鍛三郎右衛門家で世襲していた。その後裔の説によると、八鍛家の祖先は寒河江の八鍛村より出身し、最上家に仕えて大蔵城家老に抜擢されたが、豊臣方についた城主は、徳川方の山形城主に滅ぼされ、家老の職を解かれた。徳川時代になっても大蔵の地に留まり、その子孫が赤松の庄屋を受け継いだという。<sup>(2)</sup>三郎右衛門の直系は明治二十年代末に赤松を離れた。また山下家の祖先はタテ時代（伊達時代か）に足軽であったとか、三原家の祖先は平家の落人で赤松川上流の沼ノ台に入り、そこから赤松に出てきた、高田家の祖先は高田藩より落ち延びて十二代目になる、などのような武士の帰農伝承がある。さらに赤松の母村は袋という所で、そこは弘法大師が松の種子をまき終えてから、空になった袋を捨てたので、そのような地名がついたと説く伝承もある。

昭和五十年に庄屋屋敷を解体した際に、その襖や壁の中から発見された古文書は、赤松小学校長の小川忠雄先生により、丹念に修復整理解説の作業が進められている。これまでに発表された成果の中に「元治元年（一八六四）切支丹宗門御改帳」が含まれている。そこに赤松、烏川、升玉の家数六十一軒、人口三七五人と数えられている。またその解説注記に寛政六年（一四九四）は六十一軒、三一〇人、文化九年（一八二二）は六十三軒、三三三人、天保五年（一八三四）は家数不明、三〇一人中五十六人が死亡して残二四五人という数値が示されている。以上の数値の中より赤松の家数、人口のみを抽出することはまだできない。天保五年の人口激減はその

前年の奥羽大凶作の影響である。明治に入ると、「明治二十四年赤松堰疏水式来賓人」名簿に赤松よりの出席者三十七名を数え、「明治三十四年 契約連名簿 赤松上組」では下組構成員を含めて三十八名を数えるので、当時の戸数は四十戸未満であったとみて、ほぼ間違いない。昭和三十年代にはそれが三倍増になった（表1参照）。六十～七十年間にそのように戸数が急増したのは、台地上開墾による耕地増に加えて、亜炭鉱業があつたからである。隣接する舟形町は山形県の亜炭生産地としてよく知られ、そ

表1 大蔵村赤松の世帯数・人口・平均世帯員数の推移

年次	大 蔵 村			赤 松		
	世帯数	人 口	平均世帯員数	世帯数	人 口	平均世帯員数
25年	1,450	9,015	6.22	—	—	—
30年	1,509	9,044	5.99	110	659	5.99
35年	1,494	8,434	5.65	127	734	5.78
40年	1,290	6,897	5.35	92	511	5.55
45年	1,211	6,080	5.02	87	451	5.18
50年	1,172	5,598	4.78	81	391	4.83
55年	1,170	5,301	4.53	77	358	4.65

（資料） 国勢調査

の亜炭層は大蔵村北部にも連なっている。大蔵村では徳川末期には薪代わりの自家用採掘が行なわれ、明治二十年代より企業的採掘が始まり、大正期までには企業として確立した。赤松周辺には四炭山があり、昭和四十六年まで操業していた。<sup>(4)</sup>赤松では昭和二十～三十年代が最盛期で、庄内方面からも労働者の来住があつた。その事業主はほとんど赤松出身者ではなかったが、赤松の全戸が多かれ少なかれ鉱山関連の仕事に従事していた。農業の傍ら、炭山に行つて、採掘、運搬労働に直接従事したり、炭俵を編んだりした。俵編みは子供や婆さん<sup>ババ</sup>方でも十分収入があつた。夏はトロッコで烏川の舟場まで石炭を運び、冬はそりを用いた。そりを引く馬も農家で飼っている馬が役立てられた。明治中期以降の新田開墾とその後の炭山操業によつて、赤松での分家創出は容易に進み、他地区から赤松は炭山があるから良いと羨ましがられた。来住者との婚姻もあつた。赤松の近隣組は以前は六組あり、炭山専従者だけで一組を成した。それが三十年代半ばからの炭鉱の斜陽化、四十六年の閉山によつて、来住者のほとんどは転出し、ムラ内からの転出も生じると同時に、冬季出稼ぎや公共事業の日雇労働に出る必要が生じてきた。その必要性は五十年代に入つても変わっていない。五十五年冷害では米は平年の八割の出来具合だったので、出稼ぎに出る人が多くなった。村勢要覧による大蔵村の昭和五十年の出稼ぎ世帯数は四六八で、全世帯数の四割近くを占めている。この出稼ぎ率の高さの一因は、赤松にみられるように、かつて男子労働力を吸収していた鉱業の衰退である。なお四十九年の山崩れの原因については、坑道掘による地盤の緩みを挙げる人災説、自然の不可抗力を挙げる天災説があつて係争が生じ、県で原因究明中である。

職業構成は五十四年の七十八世帯中、農家が六十世帯ある。専業農家も  
なくはないが、水稻耕作の機械化が進み、片手間に日雇に出たりするし、  
冬季間は出稼ぎに行くので、兼業農家が主である。自営業として、土建・  
建築業関係が六世帯、豆腐屋、酒屋と簡易郵便局、美容業、呉服店、食品  
と石油販売（ガソリンスタンド）、鉄工所、事務機器製造が各一世帯あり、  
他に東漸院（曹洞宗）住職一世帯がある。あるイエでは五十五年に電卓文  
字盤組立工場を庭内に設けて、女子労働力の若干の雇用機会を生み出して  
いる。階層については、徳川時代の庄屋の経済力は別格  
であったが、本百姓、水呑、名子の間には大きな開きが  
なかったらしい。三郎右衛門の管轄面積自体も庄屋とし  
ては広くはなかったといい、嘉永元年（一八四八）の契  
約帳には、彼は契約の一構成員として名を連ねている。  
また昭和初期に長く部落代表を勤めたY氏にしても、炭  
焼きをしたり、昭和九年の大凶作の翌年は出稼ぎに行っ  
た。農地改革時には自作農と小作農がいて、地主はいな  
かった。

（松本）

## 第二章 人口・家族

### 1 人口

「住民基本台帳」（昭和五十四年七月現在）によると、  
赤松は、人口三八一人（男一九三、女一八八）、七十八世  
帯からなるムラである。

表 2 五歳階級別人口構成

年 齢	総 数	男	女
総 数	381(100.0)	193(100.0)	188(100.0)
0～4歳	17( 4.5)	8( 4.1)	9( 4.8)
5～9	29( 7.6)	13( 6.7)	16( 8.5)
10～14	20( 5.2)	8( 4.1)	12( 6.4)
15～19	30( 7.9)	15( 7.8)	15( 8.0)
20～24	32( 8.4)	22( 11.4)	10( 5.3)
25～29	25( 6.6)	14( 7.3)	11( 5.9)
30～34	23( 6.0)	13( 6.7)	10( 5.3)
35～39	19( 5.0)	6( 3.1)	13( 6.9)
40～44	24( 6.3)	13( 6.7)	11( 5.9)
45～49	29( 7.6)	14( 7.3)	15( 8.0)
50～54	35( 9.2)	18( 9.3)	17( 9.0)
55～59	26( 6.8)	13( 6.7)	13( 6.9)
60～64	22( 5.8)	12( 6.2)	10( 5.3)
65～69	18( 4.7)	7( 3.6)	11( 5.9)
70～74	9( 2.4)	3( 1.6)	6( 3.2)
75～79	16( 4.2)	9( 4.7)	7( 3.7)
80～84	6( 1.6)	5( 2.6)	1( 0.5)
85～89	1( 0.3)	—	1( 0.5)

（資料）「住民基本台帳」

年齢構成（三区区分）をみると、〇～十四歳が六十六人（十七・三％）、十  
五～六十四歳が二六五人（六十九・六％）、六十五歳以上が五十人（十三・  
一％）となっている（表2参照）。  
ということは、かなり「人口高齢化」が進行している地域であるといえ  
よう（厚生省人口問題研究所新推計〔昭和五十六年十一月〕によれば、こ  
のムラの老人人口比率は、わが国が昭和六十九年に示すと推測されている  
数値〔十三・二四％〕に相当する）

ところで、このような「人口高齢化」が進行している地域の家族構成・家族構造は、どのような形態をとっているのだろうか。

## 2 家族

まず、家族の人口学的側面から検討することにしよう。

家族員数は、六人家族が最も多く、つぎが四人家族となっており、平均家族員数は、四・八八人である(表3参照)。ということは、比較的規模の大きい家族が存在しているということである(昭和五十五年「国勢調査」結果によれば、わが国郡部の平均世帯人員は、三・七六人である)。

家族規模の大小は、子供数、家族構成および家族における世代累積の状況に規定されることになる。しかし、前述の年齢構成をみると、子供数が多いとは、いえないだろう。とすれば、このムラの家族規模が比較的大きいのは、家族構成と世代累積に要因を求めざるをえない。

そこで家族構成と世代累積の状況をみてみることにしたい。

家族構成を「核家族」、「単独」、「その他の家族」に三分類すると、「そ

表3 家族員数別家族数

家族員数	家族数(%)
総数	78(100.0)
1人	4( 5.1)
2人	5( 6.4)
3人	9( 11.5)
4人	16( 20.5)
5人	12( 15.4)
6人	17( 21.8)
7人	10( 12.8)
8人	3( 3.8)
9人	1( 1.3)
10人	—
11人	1( 1.3)

(資料)「住民基本台帳」

表4 同居世代数と家族構成

世代数	総 数	核 家 族				単 独	その他 の家族
		小 計	夫婦のみ	夫婦と子供	片親と子供		
総 数	78(100.0)	24(30.8)	4(5.1)	18(23.1)	2(2.6)	4(5.1)	50(64.1)
一世代	9( 11.5)	4( 5.1)	4(5.1)	—	—	4(5.1)	1( 1.3)
二世代	24( 30.8)	20(25.6)	—	18(23.1)	2(2.6)	—	4( 5.1)
三世代	41( 52.6)	—	—	—	—	—	41(52.6)
四世代	4( 5.1)	—	—	—	—	—	4( 5.1)

(資料)「住民基本台帳」

表5 世代別人口構成と家族構成

世 代	総 数	核 家 族				単 独	その他 の家族
		小 計	夫婦のみ	夫婦と子供	片親と子供		
総 数	381(100.0)	83(22.2)	8(2.1)	70(18.3)	5(1.3)	4(1.0)	294(76.8)
0～29歳	153(100.0)	35(22.9)	—	33(21.6)	2(1.3)	—	118(77.1)
30～59	156(100.0)	41(26.3)	3(1.9)	35(22.4)	3(1.9)	2(1.3)	113(72.4)
60～89	72(100.0)	7( 9.7)	5(6.9)	2( 2.8)	—	2(2.8)	63(87.5)

(資料)「住民基本台帳」

の他の家族」が、最も多くなっている（表4参照）。

これを、世代数でみると、三世代家族が全体の半数以上を占めていることになる（表4参照）。この両者をあわせた家族構成ということになると、「三世代のその他の家族」が、最も多く、つぎが、「二世代の夫婦と子供からなる家族」となっている。しかし、この「二世代の夫婦と子供からなる家族」は、やがて「三世代のその他の家族」に移行する前段階の家族なのかもしれない（表5参照）。

いずれにせよ、このような家族構成、世代構成が、このムラの家族規模を大きくする要因となったといえるのではなからうか。

つぎに、人生の諸段階別に家族構成が、どのように移行するかを検討することを通じて、このムラの家族構造（「家族形成習慣体系」）家族を形成する際の人々の好み、あるいはくせを推察してみたい。

○二十九歳層を「子世代」、三十～五十九歳層を「親世代」、六十～八十九歳層を「祖父母世代」とすると、各世代とも「その他の家族」で生活しているものが圧倒的に多く、「夫婦のみの家族」、「単独」はきわめて少ない（表5参照）。

ということとは、生涯を「その他の家族」で生活することが、このムラの一般的な形態であるといつてよからう。とすれば、このムラの家族構造は、「現状維持型」家族（長男相続を基盤として親夫婦と一組の子供夫婦の同居を特徴とする家族）ということにならう。

このような家族構造なるが故に、続柄構成も直系尊卑属が比較的多い、つまり世代的連続に志向する形態を示しているのであろう（表6参照）。

（清水）

表6 続柄構成

世帯主	78(1000.0)
配偶者	67( 859.0)
配偶者の血族	1( 12.8)
子の配偶者	122(1564.1)
子の孫	18( 230.8)
曾孫	37( 474.4)
父母	1( 12.8)
	16( 205.1)
	30( 384.6)
兄弟	6( 76.9)
姉妹	3( 38.5)
孫の配偶者	1( 12.8)
兄弟姉妹の配偶者	1( 12.8)
祖母	1( 12.8)
姪甥	1( 12.8)

（資料）「住民基本台帳」

### 第三章 ムラ組織と契約

赤松のムラ組織には契約組、班（区・組）、青年団、各種の講などがある。馬づくり組合（後述）は馬を飼わなくなつてから止めた。娘たちが旧十月二十日に集まって会食したツチアライ（チチアライ）も二十数年前から行なっていない。赤松の場合、契約総会が部落総会であり、伝統的な契約が葬式と宴会の契約組と、日常的な問題を処理する部落代表・班組織に分化してきた形態である。

契約の成立時期は嘉永元年（一八四八）より前である。その年の議定帳は、十六人の連名で旧十月二十日の朝夜の会食料理内容と、諸作物を盗んだ者への罰則を記している。明治十九年の記録も同様で、明治三十七年には死生の事、屋普請土つき、橋道路普請、萱林の取り締りと刈り取り期日、村仕事・寄合に欠席した場合の手数料、盗人懲戒委員などの項目についての決定を記している。契約には本来当番（トイマ当前）の制度しかなかったが、

明治に入ってから、役場との連絡に当たる組長（後に部落代表）とその補佐役の小走りの役割が別にあった。小走りに対しては各戸より米が手間賃として与えられた。後に戸数が増えてから、小走り一人では各戸への伝達が難しいので地割りによる班分けが始まった。各班長が部落代表との中間に立って各戸に伝達する。現在は五班あり、部落代表は当番班で選出する。班長は班内各戸が年番で引受ける。戦後、農事代表一名と農事班長が設置され、それと同じシステムで選出する。五十年代に入ってから、それまで当番班で部落代表と農事代表を選出していたのを、契約総会で当番班員を候補者として投票により選ぶ制度に改められた。都合のつかない辞退者が現われてきたためである。農事代表については非農家は選挙権をもつが、被選挙権をもたない。農事代表の仕事の一部を分けて、共済部長を最近新設した。また各班には任期二年の委員が三名ずつおり、総会に代わる委員会を構成して班内各戸の意見を代表する。昔の部落代表は一人で何年も勤めた例があったが、それ以外はすべて契約本来の当番制の原理の上に成り立つ組織であることは明らかであろう。

契約組は上組下組の二つがある。この二組は明治二十三年にはすでに分かれていたことは文書から判るが、それ以前はどうであったかは未詳である。一つの仮説であるが、前述の嘉永元年および明治十九年の議定帳にみえる名前はいずれも、現在の下組に属するイエの先祖である。幕末の村絵図面にある台地上九軒の内、下村寄りの三軒は現在の下組、他の三軒は上組（残り三軒の系譜は未詳）に結び付くので、上組の成立は台地上の開発が進んでからのことと推測される。ただこの推測では、徳川期には契約非加入戸が相当数あったことになる。現在、契約に加入していないのは寺と

新別家（分家後十余年経つが、加入希望をもたない）の二世帯のみである。契約への加入は、新別家でも転入戸でも赤松で三年ほど暮らして永住の見込みがあれば、加入金（五十四年で二千元）を納めて加入できる。加入金を納めるのは、共有林十町歩と葬式用膳枕や若干の現金などの共有資産をもつためである。転入戸は契約財産権を放棄する。明治前半まで入会地であった山林は現在は国有林になっている。山林は立木を伐らないと金にならないので保有金は乏しい。そのため昔から基本金は、各戸より集めた分と膳枕の貸し賃を基礎にしていた。膳枕借り賃は一組から借りると千円、両組からだると二千元であり、部落経費に充てるには少ない。補助金のつくものはそれで充当するが、それ以外の必要経費は各戸分担になる。農事代表や共済部長などの手当ても農家各戸で分担支出する。

契約総会の期日は伝統的に旧十月二十日であった。それで総会を二十日講<sup>コウ</sup>とも呼んだ。昭和四十三年より、出稼ぎのため期日を早めて新十一月十日頃に行なっている。以前は契約日の前後に馬を飼う農家の若衆が、馬<sup>ウマ</sup>づくりと称して餅を掲ぎ、会食をした。馬づくり組合は契約に準ずる組織、当番制を有していたので、若衆契約のような一面を示している。春の耕作前（蹄鉄打ち）にも米集めをして餅を掲いだ。契約の方は、かつての宴会は総会の後は当番の家に分かれて、当番が最上川で獲れた鮭などを料理したのを肴に、泊まりがけで呑む打つをしたという。総会を円滑に運ぶために事前に幾組かに分かれて、大体の意見を集約してから総会につなげたこともあった。近年は赤松公民館を会場に、上組下組が合同で総会懇親会をする。一戸一人が出席する。婦人の出席も多くなった。共同施設や神社などの新設、保全のための経費分担、作業分担に関わる事項が主な議題であ



り、討議の後で翌年度の部落代表、農事代表を投票により選出する（写真参照）。宴会会費は事前に各戸二百円ずつを集め、それは酒代に充てる。料理は各自重箱に詰めてきたものを勧め合う。共食終了後に契約組当番の引継ぎをする。契約の当番は年番制で、二人一組（世帯組）に組む。十数年毎に、契約帳名簿の記載順にその番が回ってくる。当番の通常の仕事は契約組共有の膳碗の管理、総会時には懇親会の準備、会計をする。自分の契約組のイエに不幸があれば、他の契約組の各戸に知らせて回り、ケヤクセン（トムライともいう。二百円ずつ）を集めて来る。当番が葬儀の会計をする。共に当番をした二戸はその後もし関係を保ち、どちらかのイエに不幸があれば他方のダンナ、ムスコと女手一人は必ず家族同様に手伝う。ダンナは不幸の連絡を受けるとすぐに、同じ契約組の当番と各戸に通知する。そのダンナが葬儀委員長となり、当番や各戸と協力して葬儀一切をとりしきる。不幸を出したイエの家族は七日間家を出られないという忌服期間があり、彼等に葬儀の一切を任せるのである。葬儀委員長より通知を受けた各戸はケヤクセン百円と餅白米一升を届ける。この時、フカシ番八戸は生米でなく、赤飯に蒸して持参する。フカシ番は長年その役をしていないイエが当たる。八戸の選定はその年数の長い順で、同年のイエがあれば不幸のイエに距離の近いイエが優先して決められる。フカシ番は集まった米を蒸す役割も持つ。近頃はフカシ番でなくても、蒸して持参する傾向が生じている。電気炊飯器の普及した結果かと思われる。各戸は集まって葬具作りやその他の手伝いもする。近年になって、村営火葬場を用いたり、中には新庄の仏具屋に道具を買い求める傾向もあって、葬儀の仕方も多様化してきた。火葬場の都合などで、告別式が火葬の前になったり後になったり

して、墓地への行列にも人の多少が生じている。全体として手伝い仕事は減少してきた。

葬儀には契約組とは別に重ノ内（ジュウノウチ）という関係がある。赤松の全戸が不幸のイエに重ノ内を持参する。親戚や友人は重ノ内二ツ、一般は一ツという原則である。重ノ内とは米や、味噌汁などの具（豆腐、コンニャク、フ、油揚げ、春雨、醬油、さきげなど）で、重箱二重、あるいは一重分の分量を目安にしている。とくに濃い親戚や親しい友人は三ツ四ツと持参する。親戚として「知らせ」を受けない薄い関係の親戚は他人同様に一ツ分を持参する。親戚間の相互扶助は、葬儀の場合よりは、家普請、結婚式、手伝い頼みの場合に顕著に行なわれる。

契約は戸主で構成したが、その後継者は若衆、青年団を構成した。昔の若衆は萱場の取り締りや橋道路普請を契約より依頼されて行ない、旧八月一日（八朔）に巖神社の夏祭りを主催した。神社の掃除は老人クラブで担当し、宮守りは法印様と氏子総代で行なっている。祭り当日は宮守りがお神酒をあげる。境内の土俵で小学生の草相撲をし、素人演芸会をする。時には白須賀から道化のある地芝居を招く。祭日は二十年前から新暦九月一日に改め、最近では帰省者の多い盆にしている。以前は若衆に四十歳位まで出たが、青年団となっている現在は原則として結婚するまで、実際には二十五歳位になると恥づかしが出て出なくなるという。巖神社とは集落を合せて反対側の北部に山神社がある。山神社は宮岡の三戸で守り、お産の神様であるので、女性がお参りする。山神社の祭りは四月十二日にある。巖神社の北側、少し離れた所に観音堂がある。法印様が観音堂を守り、三月十七日のお祭りと盆踊りを主催する。法印様は、ムラの子供が十五歳

になると、肘折口から三泊四日で月山参りに行く先達をした。観音信仰は主婦層にあり、三組ほどの観音講があつて、それぞれに毎月十七日に組内回り番の宿に集まる。五月、八月頃に最上三十三カ所巡りに希望者が行く。以前は先達に従つて十日間歩いたが、最近バスで四泊五日ほど回る。また栃木県古峰神社に春、代参者を送るクモハラ講がある。クモハラ講は男女が毎月十三日に三組に分かれて、それぞれの宿で賄いをして会食する。代参も近年はバス会社の企画に乗つて、関東地方の観光地へも足を延ばす。他に五人だけで荒神講をしている。さらに元日に年頭礼として、歳祝い(厄歳)の男、二十五、四十二、六十一、七十七、八十八歳の者が資金を出し合つて、各戸のダンナに御馳走をする。学校を会場に羽織袴で揃い、烏川の阿吽院(羽黒山系)の神主を頼んでお祓いをする。最近女性性の三十三、四十九、六十九歳の者も加わつており、これがムラの新年会となる。年頭礼には歳祝いに当たる者は出稼ぎ中でも帰ってくる。以上のように赤松では信仰に関わる行事が多彩にあるが、契約自体は神社維持を考慮する以外は、宗教色はみられない。最近小学校中心の行事として、十一月にPTA主催の餅搗き大会が始まり、これはちようどかつて馬づくりで餅搗きをしてきた時期を穴埋めした形である。学校の運動会にはムラ中総出で賑やかに行なう。

概括的にいえば、赤松の契約は村契約による村寄合、葬式契約の両面を備え、明治以降はそれぞれの面での組織を分化させて発展させてきたものといえよう。大蔵村では他に、肘折の温泉株を軸とする加入制限の厳しい契約もある。<sup>(7)</sup>大蔵村中心部の清水には清水一番組、二番組、三番組という三組の契約がある。三番組の場合、全戸加入で、かつては共食をする親睦

中心の契約であつたが、戦時中に膳碗を売り払つてしまい、今は公共事項の会議をする契約に変わったという。肘折の場合は特別として、大蔵村の契約は村寄合、「死人契約」が特徴的である。(松本)

#### 注

- (1) 調査は一九七九年七月から一九八一年八月にかけて三回実施した。大蔵村教育委員会の佐藤忠良氏、赤松小学校校長小川忠雄氏、赤松の長老山下円蔵氏、三原仁助氏、山下千代治氏はじめ各位の御協力を得た。とくに八飯正雄氏には終始一方ならぬお世話になった。記して謝意を表したい。
- (2) 八飯清太郎『八飯家の姓と家系の概要』私家版、一九六九。
- (3) 赤松古文書は小川忠雄・赤松古文書『第一集』『第三集』一九七八～一九七九、『八飯家文書について』一九七九、『鈴木佐忠翁文書』一九八〇、を参照した。
- (4) 『大蔵村史』一九七四、三三八三～四二頁、四八五～四八七頁。
- (5) 蒲生正男『日本のイエとムラ』大林太良監修『世界の民族・東アジアⅡ日本・中国・朝鮮』第十三巻、一九七九、二十八頁。
- (6) 赤松に代々住んでいる修験。出羽三山より認可状を受けて霞場をもつ里山伏、末流山伏を、僧正と並ぶ最高位の僧綱である法印と呼んで、人々は敬称にしたようである。最上川沿いの烏川には阿吽院という有力修験がいて、置賜、村山地方から最上川を下ってくる参詣者を肘折口より三山へ送り込んだ。
- (7) 『大蔵村史』、一四五～一五三頁。『大蔵村史編集資料(寺院・修験・講閣係史料)』第四集、一九七五。

### 第三部 西村山郡河北町沢畑の事例

#### 第一章 調査地の概況

沢畑<sup>サハタ</sup>は山形盆地の西端、山際に位置する街村である。集落内の馬場と呼ぶ高台に登ると、晴れた日にははるかに宮城県との県境をなす山脈や、村山市、東根市、天童市などの各市街地も遠望できる。沢畑は、小さいが水

流の強い滝の沢川の扇状地にある。沢畑の東二キロほどのところを最上川本流が流れ、周囲の平地に水田が大きく広がっている。沢畑から河北町の中心地である谷地<sup>ヤチ</sup>には十五キロで、沢畑と谷地を結ぶ直線状の道路に沿って新住宅、新店舗が次々と建築されており、やがては谷地本町と沢畑の家並みが連続しそうな勢いである。

沢畑から山形市まで車で四十五分ほどの距離にあり、谷地、寒河江、天童などに通勤する人も多い。河北町には果実缶詰工場、スリッパ工場、電気製品工場やその他の工場もあり、マイクロバスで従業員の送迎があるので、通勤しやすい。沢畑には現在二百戸を上回る戸数があり、非農家も多い。農業は水稻耕作が主体である。専業農家は五、六戸と少なく、農家のほとんどが第二種兼業農家で、また内職としてスリッパ接着をする人も多い。沢畑内部には雇用の場はない。

集落の成立は古い。町史によると沢畑南部<sup>カネウエバタ</sup>(上沢畑)にある月山神社境内のお月山遺跡<sup>ツキヤマ</sup>からは、竪穴住居址や縄文中期の土器などが出ている。鎌倉末の円覚寺文書に三曹司という地名が載せられており、それは沢畑を指す。寛文九年(一六六九)の沢畑文書に水押村、沢畑村、一之坪村の村名がみえる。水押村は沢畑北部の下沢畑<sup>シモサワバタ</sup>を指し、沢畑村は上沢畑、一之坪村は下沢畑の北部を指すと推定されている。村山地方では古代条里制の遺構が確認されているが、この一之坪村という地名も古代の名残りではないかと考えられている<sup>(2)</sup>。ところで、沢畑における近世の所領関係は複雑で、幕末期には下沢畑は松橋村<sup>マツハシ</sup>、上沢畑は工藤小路村<sup>クドウコウジ</sup>に属していた。松橋と工藤小路はともに谷地本町の地名であり、谷地本町が分割されて周辺の村々と組合わされ、別々の名主の支配下に置かれていたわけである。前述の水押、沢畑、一之

坪の三カ村、後述の松橋、工藤小路の二カ村に分割されていたけなら、まだそれほど複雑ではないが、沢畑の内に旧村の飛地が散在しており、徳川時代の村を自然村とみる枠組をここに適用することはできない。ちなみに、それに関して現在の沢畑の住所表記の問題がある。住宅配置図で各戸の所番地をみると、極めて錯雑している。それは、明治十六年に旧八カ村が合併して谷地村が発足した時点に話が遡る。その際、各旧村に対応させて十千の一字を番地の上に記すことに決めた。大町村を甲、前小路村を乙、新町村を丙、荒町村を丁、松橋村を戊、上工藤小路村を己、下工藤小路村を庚、北口村を辛と表記することになった。現在の沢畑各戸の住所をみると、甲二十六戸、乙三戸、丙一戸、戊七十三戸、己五十六戸、庚四十一戸、辛四戸があり、さらにこの外に岩木一戸、沢畑二戸、十二堂三戸、谷地五戸の計二一四戸があつて、各戸は複雑に分布している。量的には、松橋村の戊、工藤小路村の己と庚が多いので、両村に属したイエが沢畑の主要部分を成すことには間違いない。また明治以降、他村の飛地に家を建てて、戊己庚以外の住所をもつに到つたことを差引いても、戊己庚自体が複雑に入組んでいるので、集落内でも隣りのイエは別の村に属するという状況があつたことを想定しなくてはならない。

村山地方は徳川後期に特産物、紅花<sup>ベニバナ</sup>で栄えたことで有名である。村山の中心地は寒河江と谷地であり、谷地に近い沢畑にも大商人がいた。下沢畑には堀米四郎兵衛<sup>ホリメシロベヱ</sup>、安部権内<sup>アベゴンナイ</sup>などの大規模地主が居て、有力商人に投資し、その利潤を土地の取得に投資していた。幕末期に谷地地区の大地主十二人が地主組合、泰平講を組んだが、明治八年の山形県調ではその十名中で米立附の筆頭が安部権内の二、三八六俵、第二位が堀米四郎兵衛<sup>(3)</sup>(実)の二、

二四五俵で群を抜いていた。今でも両者の屋敷は沢畑に残されており、とくに四郎兵衛屋敷は広い堀に囲まれた二千坪の敷地があり、その庭内にはまた堀を巡らした御朱印蔵があつて、往時の繁栄振りが偲ばれる。(写真参照) 明治以降、農地改革までには地主層内部でも経済力の変化はあつたようだが、彼等に続く有力家は何軒もあつて、〇〇様と様付けで呼ばれていた。その名残りは今も聞かれる。

ところで四郎兵衛も権内も十一代前後の家系であり、二十代以上の家系を伝えるイエは他にある。戸数の多いのは宇野姓五十九戸、小野姓三十五戸であり、堀米姓二十六戸、安部(阿部)姓二十二戸を上回っている。また

明治以降に指導的地位に上がつた人物には必ずしも様が付けられない。総本家でありながら、様付けで呼ばれないイエが何戸もある。時代によるイエの浮沈は十分考えられる。この点は後述のカマエの性格を検討する上で興味深い問題であるが、本稿ではそこまで立入る余裕がない。

沢畑における複雑な所番地は、徳川後期の地主層による活発な土地売買の結果であるかも知れない。

(松本)

## 第二章 人口・家族・親族

### 1 人口

「住民基本台帳」(昭和五十五年十一月現在)によ

表1 五歳階級別人口構成

年 齢	総 数	男	女
総 数	967(100.0)	476(100.0)	491(100.0)
0～4歳	72( 7.4)	42( 8.8)	30( 6.1)
5～9	65( 6.7)	36( 7.6)	29( 5.9)
10～14	48( 5.0)	22( 4.6)	26( 5.3)
15～19	62( 6.4)	30( 6.3)	32( 6.5)
20～24	52( 5.4)	22( 4.6)	30( 6.1)
25～29	74( 7.7)	36( 7.6)	38( 7.7)
30～34	82( 8.5)	48( 10.1)	34( 6.9)
35～39	46( 4.8)	26( 5.5)	20( 4.1)
40～44	63( 6.5)	34( 7.1)	29( 5.9)
45～49	69( 7.1)	31( 6.5)	38( 7.7)
50～54	87( 9.0)	42( 8.8)	45( 9.2)
55～59	68( 7.0)	29( 6.1)	39( 7.9)
60～64	55( 5.7)	26( 5.5)	29( 5.9)
65～69	52( 5.4)	22( 4.6)	30( 6.1)
70～74	30( 3.1)	9( 1.9)	21( 4.3)
75～79	21( 2.2)	11( 2.3)	10( 2.0)
80～84	13( 1.3)	8( 1.7)	5( 1.0)
85～89	7( 0.7)	2( 0.4)	5( 1.0)
90～94	—	—	—
95～99	1( 0.1)	—	1( 0.2)

ると沢畑は、人口九六七人(男四七六、女四九一)、二一四世帯からなるムラである。

年齢構成(三区分)をみると、〇～十四歳が一八五(十九・一%)、十五～六十四歳が六五八(六十八・一%)、六十五歳以上が一二四(十二・八%)となつている(表1参照)。

ということは、「人口高齢化」が、相当進行しているムラであるといえよう。一方、若年層(十五～二十九歳)に着目すると、若年層は、この親世代(四十五～五十九歳)の人口とほぼ対応している。とすると、現状では、ある程度、後継者が確保できているということになろう。

(資料)「住民基本台帳」

## 2 家族

このような人口構成は、家族構成および家族構造とどう関連しているのだろうか。

家族員数をみると、五人家族、六人家族が多く、平均家族員数は、四・五二人となっている(表2参照)。

これらの家族員は、どのような家族構成の下で生活しているのだろうか。家族構成を「核家族」、「単独」、「その他の家族」に三分類すると、このムラでは、「その他の家族」が多い、これを世代数で見ると、三世代家族が最も多くなっている(表3参照)。

世代数と家族構成を組み合わせると、「三世代のその他の家族」が五十

表2 家族員数別家族数

家族員数	家族数(%)
総数	214(100.0)
1人	9( 4.2)
2人	23( 10.7)
3人	38( 17.8)
4人	28( 13.1)
5人	47( 22.0)
6人	45( 21.0)
7人	14( 6.5)
8人	7( 3.3)
9人	3( 1.4)

(資料)「住民基本台帳」

%を超えており、つぎが、「二世代の夫婦と子供からなる家族」となっている(表3参照)。

ということとは、このムラの家族構造は、世代的連続を志向する家族であると考えられる。この点を世代別人口構成と家族構成との関連でたしかめてみたい。

表3 同居世代数と家族構成

世代数	総数	核 家 族				単 独	その他 の家族
		小 計	夫婦のみ	夫婦と子供	片親と子供		
総 数	214(100.0)	71(33.2)	14(6.5)	44(20.6)	13(6.1)	9(4.2)	134(62.6)
一世代	23( 10.7)	14( 6.5)	14(6.5)	—	—	9(4.2)	—
二世代	69( 32.2)	57(26.6)	—	44(20.6)	13(6.1)	—	12( 5.6)
三世代	108( 50.5)	—	—	—	—	—	108(50.5)
四世代	14( 6.5)	—	—	—	—	—	14( 6.5)

(資料)「住民基本台帳」

表4 世代別人口構成と家族構成

世 代	総 数	核 家 族				単 独	その他 の家族
		小 計	夫婦のみ	夫婦と子供	片親と子供		
総 数	967(100.0)	214(22.1)	28(2.9)	156(16.1)	30(3.1)	9( 0.9)	744(76.9)
0～29歳	372(100.0)	80(21.5)	2(0.5)	69(18.5)	9(2.4)	—	292(78.5)
30～59	415(100.0)	109(26.3)	16(3.9)	78(18.8)	15(3.6)	5( 1.2)	301(72.5)
60～89	179(100.0)	25(14.0)	10(5.6)	9( 5.0)	6(3.4)	3( 1.7)	151(84.4)
90～	1(100.0)	—	—	—	—	1(100.0)	—

(資料)「住民基本台帳」

すると、各世代とも「その他の家族」に帰属しているものが圧倒的に多い。したがって、このムラの人々は、「その他の家族」で一生を終ることが多いということになる(表4参照)。

とすれば、このムラの家族構造は、「現状維持型」家族<sup>(4)</sup>であるといつてよからう。このような家族構造なるが故に、人口構成、家族構成も世代的に連続するように組み立てられているのであろう。このことは、続柄構成

表5 続柄構成

世帯主	214(1000.0)
配偶者	177( 827.1)
子	260(1215.0)
子の配偶者	75( 350.5)
孫	145( 677.6)
孫の配偶者	3( 14.0)
曾孫	2( 9.3)
父母	15( 70.1)
兄弟	65( 303.7)
姉妹	1( 4.7)
甥姪	5( 23.4)
祖母	1( 4.7)
伯叔父母	1( 4.7)
同居人	2( 9.3)
	2( 9.3)

(資料)「住民基本台帳」

にも反映している(表5参照)。

### 3 親族

これまで述べてきた人口、家族のことを念頭において、つぎに、親族の問題を検討しておきたい。

まず、祖先中心的な親族組織として「カマエ」がある。「カマエ」は、直接の分家と孫分家および分家仲間である相分家を含むものである。

この「カマエ」仲間は、葬儀等への参集だけでなく、正月、盆には本家に集まるしきたりがある。このことを、沢畑では「カマエマイリ」とよんでいる。

つぎに、自己中心的な親族組織をみると、親類は、「イトコ」ないし「ハトコ」の範囲となっている。

このムラの親族は、以上のような構成になっているが、この親族を仔細に検討すると、親族関係は、その濃淡によって二区分される。

その一つは、「ホンゼン」(本膳)と呼ばれる濃い親族であり、もう一つは「オチャ」(御茶)といわれている薄い親族である。「ホンゼン」親類は、元来、祝儀等に際して第一日目に参集する家であり、「オチャ」は、翌日以降に参集する家であったといわれている。例えば、かつて披露宴(結婚)は、三日間も続いたそうであるが、その第一日目に参集したのが「ホンゼン」親類であり、翌日以降が「オチャ」親類ということになる。ところが、現在では、一日ですませるようになってきたので、「ホンゼン」親類とオチャ親類とを引出物で区別しているとのことである。

丁家(本家)筋の事例から「ホンゼン」親類と「オチャ」親類の範囲をみると、「ホンゼン」親類には、分家六軒、世帯主の兄弟姉妹二軒、世帯主の妻の実家、世帯主の母の実家、および世帯主の子供一軒とが含まれるが、「オチャ」親類は、孫分家六軒と「ホンゼン」親類以外の親類となっている。

なお、本家筋のなかには、「デイリシユウ」(奉公人)を使っていた家もある。そのような家では、「デイリシユウ」を親類扱いしているのとことである。(清水)

### 第三章 契約会と町内会、ムラ組織

#### 1 下沢畑の場合

下沢畑では昭和十五、六年に古い契約会を解散した。それまでは下沢畑で勢力のある四家の当主が中心となって契約会、すなわち地域の諸事ととりしきっていた。明治三十五年の下沢畑契約講員名簿では、七十名の講員の筆頭にその四人の当主の名が記されている。この四人は下沢畑の四つのカマエ（親族関係）の総代であったという。現在沢畑には三十一姓が数えられるが、かつて様付けで呼ばれたイエは聞き取りによると四姓（十二戸）に限られ、下沢畑のこの四家はその内の三姓である。毎年秋の契約会の当番は四カマエの間を回り、総代宅か当番自宅を会場にして集まった。ソバを食べたという。沢畑共有地として田畑、宅地、山林があり、それを貸して所得を挙げていた。それを上沢畑と折半し、契約会の諸経費に充てた。金貸しをして利息もとったらしい。戦前戦後に共有地は売却して、今はとくに財産らしいものはない。

戦時中は四人の内の一人が下沢畑の町内会長をしていた。戦後は、二十三年に形態を一新して契約会を復活した。契約会長、副会長と評議員十名で協議して運営するようにした。契約会長は四家の内の当主であつたらしい。戦時中に置かれた隣組（地割りによる）を引継いで、その組長が数名で当番をした。二十三年の記録では非農家三十三戸<sup>(5)</sup>より現金（一戸当六十円）ないし大豆、小豆を集め、農家六十六戸より米を（一戸一升ずつ）、全戸より大豆、小豆を一合ずつ集めて、会食の用に足した。以前は会費を

払わなかったが、戦後は共有財産が無くなったので会費分担制となった。会場も作業場（後の公民館）に決めて行なうことにした。やがて新しい制度に馴染めなかったのか、会長が辞任し、その後任者はすぐに決まらなかった。それまでに役場との関係で下沢畑は北と南の二地区に分かれ、囑託（後に区代表）がそれぞれ置かれていて、役場との連絡に当たっていた。そしてムラの事は何につけ、選出される区代表を中心にして運ぶようになっていた。それで南北の区代表が一年交代で契約会長、副会長に任ずる制度とした。下沢畑全体に関わる問題は従来通り契約会で協議することにし、契約会を二つに分けるのは避けた。長らくその制度を続けてきたが、北の総会、南の総会、契約の総会と手間がかかるので下沢畑の総会を一本化し、役場行政の手伝いをする区代表と、役場に請願する部落代表を分けて、昭和五十一年から新しい組織に改められた。

現在の役員は契約会長（下沢畑公民館長兼務）、副会長各一名、理事十名、監事二名、公民館管理人一名である。理事二名は区代表で総会選出、理事四名ずつは各区で選出し、理事の互選により会計、庶務各一名を定める。監事は会計監査、公民館管理人はその管理と施設使用料徴収をして会計に渡す。以上の役員は、区選出理事八名を除き、総会で選出し、任期は二年である。会計係、公民館管理人と別の弥富子<sup>ヤブコ</sup>地蔵別当、用水堰守りには予算から報酬が支払われる。隣組は北に六組、南に七組ある。組戸数は十二戸から四戸までの開きがある。転居によらない組替えは望まれないからである。隣組長は公報、伝達、集金などに協力する。組内の世帯に不幸のあったときは、組員が手分けして下沢畑各戸に知らせ、告銭<sup>ツケゼン</sup>を集める。総会は従来新十一月二十三日であつたが、五十二年より春分の日の前後に

している。

契約会会計をみると、毎月の会費五百円、四、五月は別に五百円ずつを各戸より納め、町から納税報償金、助成金を受け、公民館使用料等の収入があつて、総額約一五〇万円の規模である。支出中で大きいのは各種組合費などの負担金、共用施設の修繕費、報酬賃金等である。老人クラブ、若衆会、婦人会、若妻会は契約認可団体として、助成金を出す。

次に契約会以外のムラ組織をみる。青年会は学校卒業後二十三歳位までの男子で、盆踊り、春の消毒、一斉清掃を主催、担当する。卒業後は他出する者が多いので十人といない。若衆会は二十三、四歳から三十歳までの男子で五十〜六十人いる。自衛消防、風祭り、弥富子地蔵の草相撲を担当する。老人クラブは六十歳以上で、普通は農業者年金を受ける年齢（六十歳以上）まで隠居しない。昔の青年団の名残りをひく友和会は壮年者が任意に入っており、選挙時に活動する。女性では、昔は全戸のおばあさんが加入していた地蔵講（念仏講）、任意の観音講、伊勢講がある。

## 2 上沢畑の場合

上沢畑の契約講員は明治初年で四十二戸であつた。昭和二十年代半ばまでの契約会は、下沢畑同様に四人の親方（評議員）できりもりしていた。沢畑共有地の外に上沢畑独自の契約山を所有していた。そこでは萱を刈ったり、マツタケを採って売り、その代金を若衆の資金にした。共有地のある時分は契約への加入制限があり、沢畑の近辺に転出した場合、契約を抜けないこともあつた。昭和十年に上沢畑共有林の立木を製紙会社に売り、その代金で公会堂を建てた。農地改革後間もなく、沢畑共有の契約山を町

に売却して、下沢畑と折半した金は貯金した。共有地を手放してからしばらく親方衆が先頭に立っていたが、二十三年より当番制を決めて、各戸より平等に会費を集めるようになった。また事業の企画や経費分担が評議員のみによつて決められ、各戸に負担のみ降りてくるやり方に反発が出て、会長、役員は全戸による選挙で選ぶという内容の新規約が提案された。すぐには認められなかったが、大方の賛成もあつて、しばらく間を置いてから改革することに話がついた。二十年代後半より会長一名、役員十名を総会で選出するように改まった。ともに任期三年である。会長、役員は理事として、上沢畑全体に関する事項を協議する。契約組は十組であつたが、最近新住宅地を分立して、十一組になった。組に当番を置く。当番は組内の家並び順で、十一月二十三日の契約会総会で披露される。当番は前述のように契約会費（七百元）を集め、葬式時に告銭十円を集める。上沢畑の外れで火葬した際は、ワラを二十把一束ずつ集めた。地区内転居の場合は従前の組所属を続ける希望が強く、所属組からポツンと離れているイエが三例ある。契約会総会は協議の後、謡（高砂）を唱和してから懇親会に入る。以前は材料を買つて当番が調理したソバを食べたが、今は折詰を仕出屋から取り寄せている。酒は持ち寄りで、新規入会者や、その年に出産、嫁とりのあつたイエが御祝儀として寄せる。（写真参照）

上沢畑では契約会の組分けと町内会の組分けは異なる。町内会組織は戦時中からで、現在上沢畑北に六組、南に八組があり、それぞれの区代表を中心に、三月中の第二、第三日曜に北の総会、南の総会を開いている。町内会の収入は街灯料として一戸六百元を集め、役場からの納税報償金、部落育成助成金、勸農奨励金などを収入とし、衛生、防犯、防災に関する事



業に支出する。

上沢畑のムラ組織としては、学校卒業後、二十五歳までの青年団、三十五歳までの若衆会がある。青年団八人は若衆会に含まれる。若衆会は一戸から二人は入れない。以前は十一月三日に若衆契約をし、今は四月の日曜に若衆総会をして、会長、会員の交代をする。若衆会は風祭り、月山神社雪囲い、消防を担当する。四十五歳位から七十歳までの婦人が四十五人ほどで地蔵講をしている。嫁を迎えてから地蔵講に加わる。旧十月二十四日と正月二十四日に公会堂に集まり、大数珠を回す。会場を契約堂と称する。講元（親方）が道具類を保管し、年寄、若い人が三人ずつ組んで当番をし、当番六人が重箱二つを用意する。当番の家に地蔵像を祀る。同じ成員で旧三月二十八日に神参りをする。寄付を集めて、ろうそく立てを買い、沢畑各所の村の神、地蔵堂、観音様、山の神、オバ様、お月山など十カ所を回る。弁持参で、午前九時から午後三時までかかる。葬式翌日、七日、二七日、三七日まで不幸のあった家で念仏をする。御詠歌を唱える梅花講は四十歳位から六十五歳までで六十四人いる。観音講は、四郎兵衛屋敷の隣の金谷庵<sup>キンコウアン</sup>でしていたが、庵主様<sup>アジメサマ</sup>が亡くなってから集まる人が少なくなった。中年婦人層は七人組、十四人組などに組んで最上三十三観音巡りをする。三十五歳までの若妻会は毎月一日集まって懇親会をしている。

### 3 風祭り

沢畑の風祭りは若衆会が主体となって運営する沢畑全体の祭りである。期日は八月三十一日の夕刻より晩までで、沢畑に太鼓の音が響く。午後五時から、まず子供会の風送りがある。下沢畑の場合、小学三年～六年の

男子八人が、子供会育成会付添いで、中太鼓、小太鼓を交代で打ち、担ぐ。行進は公民館から下沢畑内を巡り、上沢畑との境まで行き、上沢畑の子供会が持ってきた虫送り<sup>ムシカゼリ</sup>と墨書した、幟を引き継いで滝の沢川まで行く。次に午後七時より若衆会の行列が、下沢畑は弥富子地蔵尊より、上沢畑は漆坊地蔵尊より、お神酒を一杯呑んでから出発する。若衆会会長は袴を着用して提灯を持って先立つ。中太鼓、小太鼓、横割り提灯という龍の絵、五穀豊饒、村内安全の文字を配した、横に長い直方体の提灯（両端の脚を二人で持つ）や各種提灯の混じった行列である。辻々で停まってはお神酒振舞をする。道中の太鼓の打ち方と、停まっている時のそれとは叩き方が違う。上沢畑との境で上沢畑若衆会と合流し、月山神社に昇って行く。境内にはそれと共に多勢の氏子、見物が集まっている。本殿に宮司と氏子会代表が参集している。本殿に近い一段高い所に上沢畑、その下の段に下沢畑の太鼓を据えて打ち合わせる。上と下の両若衆会長が本殿に昇って参拝する。参拝の間は太鼓も静まる。そして再度打ち合わせを二回して、沢畑風祭保存会長（法印様）の挨拶で、午後九時に終了する。昔は行列が谷地方面まで流れたこともあったという。

月山神社は田川郡月山神社より勧請したもので、その別当が古くは般若院、後に極楽院と号している法印様である。現宮司は法印家の分家に当たら。法印家は二十代以上続くという旧家であり、風祭りや沢畑にたくさんある地蔵堂の信仰の裡に、近世以前の沢畑を探る手掛かりを求められるかも知れない。過去の風祭りと契約会、カマエとの関係については別稿を期したい。

#### 4 むすび

沢畑の契約は大地主発生地帯における一形態として、多くの問題点を含んでおり、資料もまだそれを解明できるほど集まっていないし、これまで写真に納めた文書類の整理も終えていない。とりあえず本稿で概観したところでは、沢畑の契約はカマエと呼ぶ祖先中心的親族組織がかつては下位単位であつたらしいこと、それが町内会的形態に変化したのではないかとみられること、そして葬式契約の性格が薄いことをその特徴として指摘できよう。(松本)

#### 註

- (1) 沢畑の調査は一九八〇年十一月より翌年十一月まで三回実施した。河北町では山形県史編纂会議員の今田信一氏、中央公民館長浅黄三治氏、役場安部新蔵氏に、沢畑では下沢畑契約会長堀米留蔵氏、上沢畑契約会長小野九郎氏、並びに両契約の役員、区代表の皆様に御世話になった。記して謝意を表する。
- (2) 『河北町の歴史』上巻、一九六二、八五三～八五四頁。
- (3) 同書、下巻、一九八一、九五頁。
- (4) 蒲生正男「日本のイエとムラ」大林太良監修『世界の民族・東アジアⅡ日本・中国・朝鮮』第十三巻、一九七九、二十八頁。
- (5) この数字には疎開者、引揚者が含まれているように思うが、確めていない。
- (6) かつて下沢畑のあるカマエに属する某家が八十年前に分家して上に移ったが、その後約五十年後(終戦後)まで元の下契約に留まり、上の契約には入れてもらえなかったという事実があつた。昭和初年に沢畑の契約山の売却問題があつて、その代金の配分について討議された際、当時の役員であつた有力なカマエの間でもめぐことがあつたという。以上の二例は村契約におけるカマエの潜在的な役割を窺わせるものと思う。

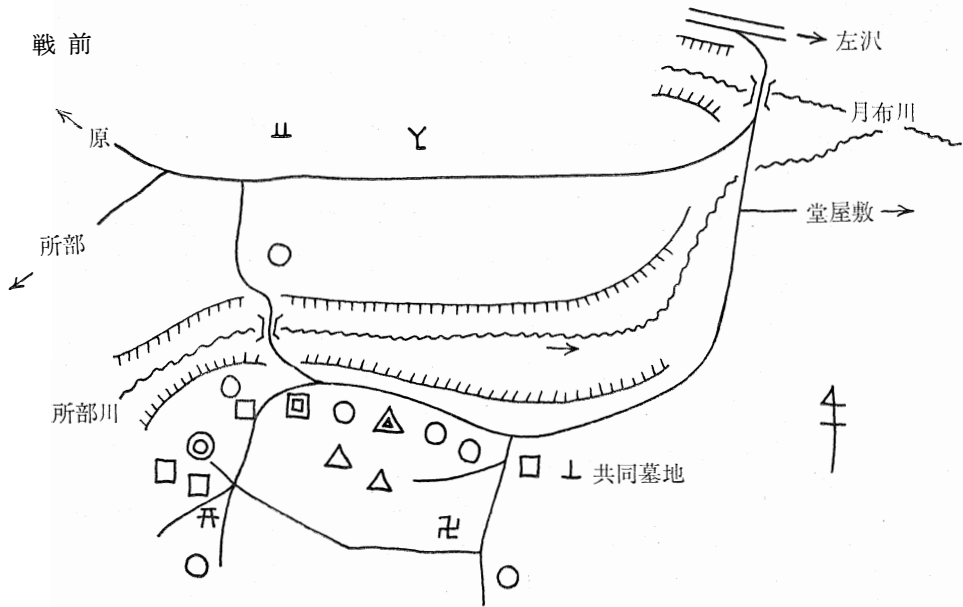
## 第四部 西村山郡大江町本郷塩野平の事例

### 第一章 調査地の概況

塩野平は最上川の支流、月布川の河岸段丘裂谷の段丘上に位置する農村集落である。その集落の中央を深い沢(所部川。月布川支流)が流れている。沢の南側の山裾の集落をモトノ塩野平、沢の北側の平坦地をハラノ塩野平と呼ぶ。現在モトノ塩野平に八戸、ハラノ塩野平に十戸がある。呼称の意味する通り、本来沢の南側に集落があり、北側はカノ、ムカイバラと呼んで人家の無い所であつた。徳川期に分家一軒がカノにあつたと伝えられるだけで、明治期にはなく、大正末にそこに分出した一戸は現存する。ハラノ集落形成は戦後のことで、新分家三戸、広い宅地を求めての転居五戸、自動車の出し入れの便利さを求めての転居一戸がそこに家屋を新築して今日に至る(図1参照)。ちなみに、大江町山間部は豪雪地帯であり、人口流出がなお続いている。町当局では人口の地理的移動をせめて町内に留めるべく、市街地近くに住宅団地を設けるなどの努力をしているが、塩野平ではこのハラへの転居現象を指して、過疎化は部落内で済ませた、と語っている。(写真参照)

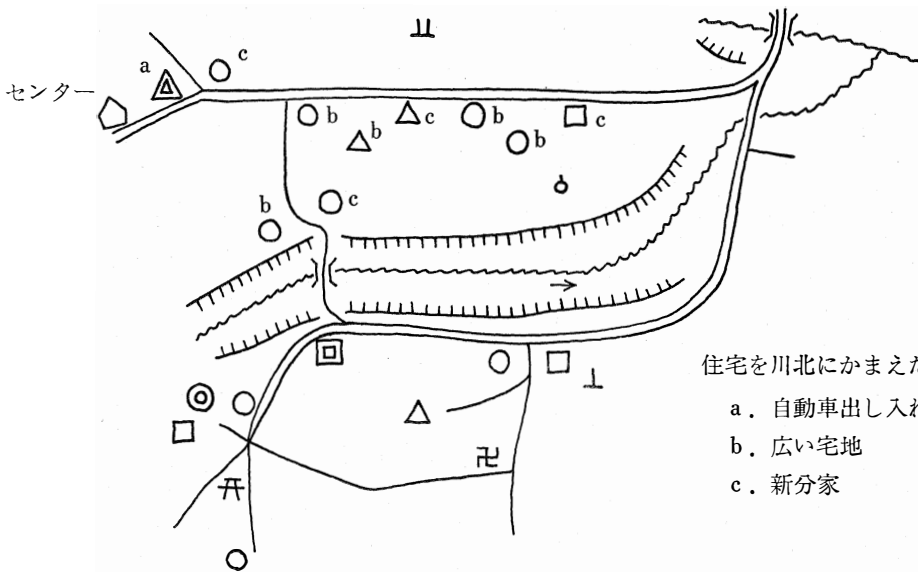
モトノ塩野平の緩傾斜地に田畑、裏山に果樹園、雑木林がある。ハラノ平坦地に田畑、果樹園がある。冬季積雪量は一メートル弱で、崖下の沢に雪を捨てて処理できる。モトノ塩野平に三宝荒神社、共同墓地、真言宗光養寺がある。寺は無住で、公民館としても利用される。ハラノ塩野平に隣

図1 塩野平世帯配置図



- 弥兵衛系統
- 安兵衛系統
- △ 銀兵衛系統
- 二重記号は本家

1981年8月現在



住宅を川北にかまえた理由

- a. 自動車出し入れの便
- b. 広い宅地
- c. 新分家

接集落の原、所部と共同利用するセンター（公民館）を新たに建築している。

塩野平から大江町中心地の左沢まで約五キロ、山形市まで自動車で一時間の距離にある。バスは月布川北岸の県道を一日十往復しており、左沢・寒河江へ通じる。左沢までなら人数によってハイヤーを頼んでもバス賃と大差ない。左沢から一日十三往復の国鉄左沢線で寒河江駅まで十六分、終点山形駅まで一時間弱で着く。また寒河江のバスターミナルから各方面行のバス便が利用できる。冬の間は除雪体制が整っており道路交通は確保されているので、塩野平か

表1 大江町塩野平の世帯数・人口・平均世帯員数の推移

年次	大 江 町			塩 野 平		
	世帯数	人 口	平均世帯員数	世帯数	人 口	平均世帯員数
25年	2,799	17,159	6.13	—	—	—
30年	2,841	16,731	5.89	—	—	—
35年	2,898	15,819	5.46	18	115	6.39
40年	2,937	14,489	4.93	20	113	5.65
45年	2,912	13,126	4.51	20	102	5.10
50年	2,782	11,801	4.24	20	101	5.05
55年	2,679	11,450	4.27	18	101	5.61

資料：国勢調査

ら寒河江、山形市などへの通勤、買物は年間を通じて可能になっている。ただ左沢まで自転車が出る高校生は、冬の路面が危険なので、その間は寄宿、下宿に頼る。現在の塩野平の人々の道路に対する要望は、県道に出るまで河岸段丘を昇降する坂道を通らずに、段丘上の両岸を平らに渡れる大きな橋の架けられることである。

徳川期の塩野平は松山藩（酒井氏）の治下にあった。『編年西村山郡史』では豊臣時代の天正十二年（一五八四）の記事に塩野平の地名がみえる。十七世紀から十九世紀にかけての村惣高は六十石から七十石未満であり、近隣諸村中では石高の低い方であった。<sup>②</sup> 大江町史編纂委員の杏沢喜代次氏によると、近世以降の月布川流域産業史は、青芋期、養蚕期、果樹栽培期に三区別して特徴付けられる。大江町西部山間の七軒地区は今日でこそ過疎化が著しいが、青芋やろう、漆を産出していた時代には、酒田の本間家に金を貸したほどの豪農もあった。村山地方の青芋収益は一般に近世後期には減少したとされているが、塩野平では昭和初期頃まで青芋栽培はみられたという。衣原料として木綿が普及し、養蚕も盛んであった時期でも、商品価値のあるうちは続けて栽培されていたわけである。塩野平に伝わる宝暦十三年（一七六三）の名寄帳をみると、村惣高六十七石の内、田方五十六石で八割強を占め、年貢米八十七俵一斗余（一俵三斗入なので約二十六石）の内、青芋代米に課される年貢は新田新畑その他に課される分を含めても四石に過ぎず、当時米作の比重がかなり高かったものと推測される。<sup>③</sup> なお、月布川北側の段丘上耕地一八〇町歩に水を送る北堰、南側八十町歩を潤す南堰の開削されたのは十九世紀に入ってからのことであるので、それまでハラは南堰の恩恵を受けられず水利の便は悪かったであろうから、

山から水を引けるモトノ塩野平の方に水田が多くあったと考えられる。養蚕期を塩野平ではいつ頃迎えたか明らかでないが、桑畑は昭和四十年代まで残っていて、三十年代にはまだかなりの面積の桑畑があったらしい。養蚕よりも米の方が良い、という理由で桑畑の水田化が進んだのは戦後の現象である。果樹栽培も戦後始まっている。塩野平の十八戸中、農家は十六戸である。その内、専業農家は二戸で、兼業農家では農外収入の方を多とする第二種兼業農家が多い。五十五年農林業センサスでは水田面積一、二四五a、果樹三〇〇aであり、農産物販売金額の第一位に稲を挙げた農家が十二戸であるので、現在でも塩野平では米作を基盤とする農業が展開している。大江町では戦後果樹栽培が盛んになって、五十年代に入ると、果樹収入が米作収入を上回るほどになっている。塩野平にはブドウ、リンゴ、モモ、カキなどを栽培する八戸がある。出稼ぎには一人出るか出ないかという程度である。最近の減反政策の進行で米作農家は転換を迫られているが、塩野平で酪農経営に進もうとして設備投資をしている間に失敗し、家族は分散して転出してしまった例が一つ聞かれた。

人口の変遷は、慶応四年（一八六八）の「人別宗門相改書上帳」で十二戸（百姓八戸、水呑四戸）、男女三十六人ずつの計七十二人が数えられている。五十六年現在では十八戸に男四十七人、女五十四人の計一〇一人である。聞取りによると、戸数増加は明治末期以降の傾向であり、昭和四十年代に最多の二十戸に達した。人口の方は昭和二十年代後半頃が最多であったらしい。近年になって平均世帯員数は増加の傾向に転じている（表一）。これは順調にヨメ、ムコを迎えて、子供の出生が相継いでいることの表われで、塩野平で誇りとするところである。他の農村集落では結婚相手が見

つからず困っているのです、そういう知人宅を訪ねて、うっかりマゴの話を出してしまふと気の毒に感じるといふ。

塩野平の全戸は同姓で、安兵衛、弥兵衛、銀兵衛の三本家の系統に分けられる。各本家の創始年代、当主の代数は伝わっていない。来住戸はなく、戸数増加はすべて分家創出によるとみられる。天明年間より約二百年間も続いている契約帳（写真参照）には毎年の契約当番名が、明治の一時期を除いて、継続的に記録されている。それを整理すると、天明寛政年間に八戸、享和十戸、文化十二戸、文政天保前期十三戸、天保後期より明治末期まで十二戸であったらしい。天保以降の戸数減少は、文政三年（一八二〇）と翌年に流行病で十五名の死者を出したこと、天保四年（一八三三）の奥羽大凶作などに起因していると考えられる。神社別当を勤め有力戸の一つであった惣七家は、流行病で働き手を失い、幕末には絶家するほどであったので、水呑として分出した分家の中にはその危機に耐えられなかったものがあつたとしても不思議ではない。文化および慶応年間の二回、塩野平で大火があつた。それが原因で転出した例もあるが、大火の前後で戸数の増減はみられない。転出戸に代わる新分家が現われているからである。前述の宝暦名寄帳は、契約帳の最古の記録年代より三十年古いものであり、そこには十八名が記載されている。この十八名という数字は当時十八戸が塩野平にあつたと解釈するより、他村者で塩野平に耕地をもつ者も含めているとみなすのが整合的である。明治二十年頃と推定されている名寄帳は、時代がかけ離れているが、他村者を含んでいる。また、契約当番を水呑が勤めたか、契約帳にムラの全戸は載っていないのではないか、という疑問があろう。しかし、これに対しては明治末期の戸数から推して徳川期にそ

れ以上の戸数があつたとは考え難いこと、<sup>(5)</sup>慶応年間の人別帳に水呑と明記されている名前が、契約当番名の中にみられることを反証として挙げられる。

階層についてみると、農地改革時に地主は二戸、小作は五戸であつた。

三本家はその中間にあつた。地主二戸は自作する一方で、主に他部落の人に土地を貸し、小作料としていずれも年貢米百数十俵を受けていたという。

小作五戸はいずれも明治・大正期の新分家であり、

本家より分与された耕地の外に、本家または他人から土地を借りていた。その内二戸は転出している。

現在の経営耕地面積をみると、旧地主は旧小作を水田・果樹園ともにしのご面積を所有しているが、最大最小の面積をもつグループは旧中間層が相対的に上昇ないし下降している。しかし最大面積をもつ農家で水田・果樹園を合わせて二二五aであり、その相互間の階層差は大きくはない。慶応年間の水呑四戸の内二戸は明治中期までに転出および絶家し、他の二戸は農地改革時に中間層、現在では経営耕地面積の大きい方に属している。このような塩野平の状況に対して近隣の農村集落からは、塩野平では皆が旦那の旦那契約をしていると羨ましがられたという。全戸が平等的だというわけである。(松本)

## 第二章 人口・家族・親族

### 1 人口

「住民基本台帳」(昭和五十五年十一月現在)によると塩野平は、人口一〇一人(男四十七、女五十四)、十八世帯からなる、きわめて小規模なム

表2 五歳階級別人口構成

年 齢	総 数	男	女
総 数	101(100.0)	47(100.0)	54(100.0)
0～4歳	12( 11.9)	5( 10.6)	7( 13.0)
5～9	10( 9.9)	4( 8.5)	6( 11.1)
10～14	5( 5.0)	4( 8.5)	1( 1.9)
15～19	8( 7.9)	4( 8.5)	4( 7.4)
20～24	2( 2.0)	1( 2.1)	1( 1.9)
25～29	8( 7.9)	2( 4.3)	6( 11.1)
30～34	10( 9.9)	7( 14.9)	3( 5.6)
35～39	2( 2.0)	1( 2.1)	1( 1.9)
40～44	5( 5.0)	1( 2.1)	4( 7.4)
45～49	9( 8.9)	6( 12.8)	3( 5.6)
50～54	6( 5.9)	2( 4.3)	4( 7.4)
55～59	5( 5.0)	3( 6.4)	2( 3.7)
60～64	7( 6.9)	2( 4.3)	5( 9.3)
65～69	4( 4.0)	3( 6.4)	1( 1.9)
70～74	3( 3.0)	2( 4.3)	1( 1.9)
75～79	2( 2.0)	—	2( 3.7)
80～84	3( 3.0)	—	3( 5.6)

(資料) 「住民基本台帳」

ラである。

このムラの年齢構成（三区分別）をみると、六十五歳以上の老人人口比率は、十一・九％（厚生省人口問題研究所新推計「昭和五十六年十一月」）によれば、この数値は、昭和六十六年頃の値となる）となっており、「人口高齢化」が進行していることになる。しかし、〇〇十四歳は、比較的多く、後継世代にめぐまれたムラであるといえよう（表2参照）。

## 2 家族

つぎに、このムラの家族構成と家族構造とを検討してみたい。  
家族員数をみると、六人家族が最も多く、つぎが四人家族と八人家族になっている。また、平均家族員数は、五・六一人であるから、家族規模が、かなり大きなムラであるように思われる（表3参照）。

表3 家族員数別家族数

家族員数	家族数(%)
総 数	18(100.0)
1 人	—
2 人	1( 5.6)
3 人	2( 11.1)
4 人	3( 16.7)
5 人	2( 11.1)
6 人	4( 22.2)
7 人	2( 11.1)
8 人	3( 16.7)
9 人	1( 5.6)

（資料）「住民基本台帳」

それでは、これらの家族員は、どのような家族構成の下で日常生活を送っているのだろうか。

まず、世代数をみると、三世代家族が半数以上を占め、つぎが二世代家

表4 同居世代数と家族構成

世帯数	総 数	核 家 族				単独	その他の家族
		小 計	夫婦のみ	夫婦と子供	片親と子供		
総 数	18(100.0)	4(22.2)	1(5.6)	3(16.7)	—	—	14(77.8)
一世代	1( 5.6)	1( 5.6)	1(5.6)	—	—	—	—
二世代	4( 22.2)	3(16.7)	—	3(16.7)	—	—	1( 5.6)
三世代	10( 55.6)	—	—	—	—	—	10(55.6)
四世代	3( 16.7)	—	—	—	—	—	3(16.7)

（資料）「住民基本台帳」

表5 世代別人口構成と家族構成

世代数	総 数	核 家 族				単独	その他の家族
		小 計	夫婦のみ	夫婦と子供	片親と子供		
総 数	101(100.0)	13(12.9)	2(2.0)	11(10.9)	—	—	88( 87.1)
0～29歳	45(100.0)	5(11.1)	—	5(11.1)	—	—	40( 88.9)
30～59	37(100.0)	8(21.6)	2(5.4)	6(16.2)	—	—	29( 78.4)
60～89	19(100.0)	—	—	—	—	—	19(100.0)

（資料）「住民基本台帳」

族となっている。しかし、四世代家族も比較的多いことに着目しておきたい(表4参照)。つぎに、「国勢調査」の家族分類にしたがって、このムラの家族構成をみると、「その他の家族」が圧倒的に多い。これを世代数との関連でみると、「三世代のその他の家族」が最も多く、つぎが「二世代の夫婦と子供からなる家族」、「四世代のその他の家族」となっている(表4参照)。

このような家族規模・家族構成は、このムラの家族構造を反映して現出しているものと思われる。

そこで、このムラの人々は、世代の経過にしたがって、どのような家族構成を経て生涯を終るのかをみてみた。すると、どの世代でも「その他の家族」に帰属しているものが多いことがわかってきた(表5参照)。

ということは、このムラの人々は、「その他の家族」の下で出生し、成長し、生涯を全うすることが望ましいと考えているのではなからうか。とすれば、このムラの家族は、「現状維持型」家族<sup>(一)</sup>ということになる。

この家族構造は、続柄構成をみると、一層はつきりしてくるようになると思わ

表6 続柄構成

世帯主	18(1000.0)
配偶者	18(1000.0)
子	28(1555.6)
子の配偶者	5( 277.8)
孫	16( 888.9)
父	3( 166.7)
母	10( 555.6)
姉妹	1( 55.6)
祖母	1( 55.6)
伯叔父母	1( 55.6)

(資料)「住民基本台帳」

れる。というのは、このムラの続柄構成は、直系親が比較的多く、世代的連続に志向している(Ⅱ「現状維持型」家族)ように思えてならないからである(表参照)。

### 3 親族

このムラの人々が、どのような家族形態の下で生活を織りなしているかがわかってきた。そこで、つぎに、個々の家族が、どの家族と「連帯」してムラ生活を送っているかを親族の面から検討してみたい。

まず、祖先中心的な親族組織であるが、このムラでは、本・分家集団を「カマエ」と呼んでいる。「カマエ」の範囲は、本家、分家、相分家、孫分家までである。「カマエ」の機能をみると、主に葬儀の時に参集することにあるようである。したがって、その他の機会、例えば、盆、正月に「カマエ」仲間が、本家に参集することはないようである。また、「カマエ」とに「氏神」や同族神をもっていない。

なお、このムラには、三つの「カマエ」があることをつけ加えておく。つぎに、自己中心的な親族組織をみると、「イトコ」ないし「ハトコ」までが、親類の範囲となっているようである。

さらに、祖先中心的な親族組織と自己中心的な親族組織との重層関係をT・G家の祖母(現在の当主からみて)の香台帳(昭和二十六年)でみてみたい。

この香台帳から親族関係をみてみると、「カマエ」のうちで本家が二〇〇円、分家仲間が五十円の香料を出しているのに対して、故人の次男は五〇〇円、三男は一〇〇〇円、長女は三〇〇円を、故人の実家は三〇〇円を



出しており、「ハトコ」でさえも三〇〇円の香料を出しているものもある。ということは、(1)自己中心的な親族関係者がカマエ仲間を上回る香料を出していること、(2)自己中心的な親族関係者の間でも兄弟間に序列がない、ことになる。とすれば、「カマエ」仲間、つまり、祖先中心的な親族組織が優位なムラであるとはいえないように思われる。(清水)

### 第三章 ムラ組織と契約講

主なムラ組織は区と組、大契約、若衆契約、青年団、念仏講、若妻会である。塩野平全戸で一区を成し、春の彼岸の常会で区会計の決算をすると同時に、区長他の役員を選出する。区長は一年交代制で役場との連絡に当たり、大契約では司会をし、その年度の全般のまとめ役をする。順番制ではない。組はモトノ塩野平とハラの二組に地割りされている。この組分けは新しいものである。

大契約は全戸の男性戸主で構成し、毎年一回、以前は旧暦十月二十六日に、昭和三十三年以降は十一月二十三日に総会協議をして、宴会をする。総会は区長が司会し、近年は共同作業も少ないし、春に常会があるので、特別な議題があれば相談する。五十六年は光養寺改築借入金返済残金を借入後の転出者二戸も含めて、平等に二十戸割りとし、転出者分は仮にその親戚で立て替えておく、と決められた。宴会の準備と給仕役<sup>トバン</sup>に当番と手方<sup>テガタ</sup>がある。いずれも伝統的な順番による年番制で、手方は二名で翌年、その翌々年の当番になる者が順に任じ、当番を補佐する。当番は総会・宴会の会場に以前は自宅を提供し、酒料理を会費制経費の均等割により賄う。契約帳の記録は当番手方名の記載が主で、契約での料理の決めや、葬式振舞

節約を申し合わせる献立の決め、祭礼時の神仏前への供物の決めなどが、時に記されている。戦後の変遷をみると、二十年より契約で餅振舞のため手方を増員しその婦人も同伴のことと定め、朝四時頃より餅搗き準備を始め、朝餅、夕御飯の二回、共食していた。大契約の日はムラ全員が仕事を休むことになっていた。三十二年になると餅の廃止を決め、朝夕とも御飯となり、三十九年からは昼一飯と改め、五十四年より会場を改築成った光養寺に定めた。総じて当番の負担を軽減する方向に変わっている。宴会には宗教的儀式は伴わず、ただ終わり近くに全員正座して、高砂、おさめの謡を唱和するのが特徴的であり、これは村山地方の他地区でもみられるらしい。宴席での座順は、区長が上座に着いた以外は年長順に座った。この時に使う食器は大契約の共有物で、葬式や他のムラ行事の折に利用される。以前は結婚式にも貸出されたが、近年は各戸私有の食器を用いている。

若衆契約は四十一、二歳位までの男性で構成する。若くして戸主になると、若衆契約と大契約の両方に出席するし、弟と共に若衆契約に出ることもあり、個人単位の年齢集団であつたらしい。年齢の下限はかつては尋常小学卒業後であつたといひ、また一説では高卒後の未婚者が青年団に入り、結婚すると若衆契約に入るともいふ。今日では後継者と生徒幼児以外の若い人々は他出しているので、若衆契約は実質的に十三人の後継者集団であり、青年団は高卒未婚者が少ないのでまとまった活動をしていない。若衆契約は七月の適当な日に旅行したり、町のスポーツ大会に参加したりしている。

念仏講は全戸の主婦で構成し、ほぼ大契約構成員の妻たちである。大契約も念仏講も自分で歩いて出席できなくなるまでは参加するので、配偶者

に先立たれている場合もあるわけである。旧暦の毎月十五日夜に、家の並び順の当番の家で、南無阿弥陀仏の軸を掛け、円座して大数珠を回す（写真参照）。旧十月十五日はお供養クモウと称して、朝赤飯、夜は酒肴で会食する。これを女子契約オナゴともいい、以前は当番宅で一日中風呂をわかし、食べては入浴するので、事前に風呂場を修理しておく必要があった。五十六年は旧十月十五日は十一月十一日に当たっていたが、嫁たちが勤めに出ており、パンチャは子守りがあるので、四日後の日曜日に期日をずらした。会場は光養寺で、午前十時より念仏、御詠歌、十二時より宴会をした。会費八百円でさしみなどを購入し、事前に一合五勺ずつ集めた米で当番が赤飯を炊き、当番と手方二人の三人が相談してそれぞれ料理したおかずや茶菓子を持ち寄る。同じ顔ぶれで二月から八月までの各月一日に神社で数参りをすカスミイリる。これは社殿の中に集まった主婦が、まず棒の小枝につけた水で額を清め（写真参照）、次に少し前進して二拍打ち拌み、神前に進んで三方に載せた二百粒の大豆を一つ取ってもう一つの三方に移して、後方に退き、それを繰り返すという、集団的なお百度参りである。二百粒を全部移し終えると、もう一回それを反復する。昔は一つずつを移していたが、今は一度に何粒も移して簡略化している。それが済むと全員そろって二拍ずつ二回打ち拌み、社殿の外に出て、神壇の裏壁をトントン叩いて拌む。神様が後向きであるからであるという。続いて境内に合祀されている稲荷などを参拝する。二月と八月はこの後に簡単な会食をする。

若妻会は年齢四十歳位までのほば若衆の妻たちで構成する。春に景勝地左沢に花見に行き、秋に寺でイモ煮会をする。

なお旧の十二月八日に地藏講がある。光養寺の仏壇中央には地藏様を祀

って、子育て地藏として信仰されており、出羽三山と結び付いたお祭りであるという。その前日午後には各戸一人がわら縄三尋ずつ持ち寄って、神社と寺の雪囲いをする。当日各戸より米、トーフ、生みそ、菜漬けを持ち寄って調理し、会食して一杯呑んでから、地藏さんにお経を上げる。それは戸主などが当番制によって行ない、子育て中、あるいは出産を控えた若妻や、他出しているそのような娘たちも帰ってきてお参りする。太鼓を叩いての踊りもある。

## むすび

塩野平の契約は戸主契約（大契約、ダンナ契約）、主婦契約（女子契約、念仏講）、若衆契約が揃っており、全戸加入の当番制をもつ。ムラ戸数が少ないので、機能別に分化した組織はみられず、全戸がまとまっている。

大江町の山間集落では人口流出のため、契約の成員が集まることすら難しくなっているという。また他の農村集落や、市街地では、地元を離れて温泉旅館に一泊旅行したり、料亭を会場にしてカラオケなどを楽しんだりする形態に変わっている例が多く、塩野平のようにムラ内とする契約講が続いている例は珍しくなっている。いわば旅行型や料亭型は当番の労力負担は業者に転嫁する一方、経費は嵩むことになる。この点をとらえて、塩野平のあるインフォーマントは、塩野平では全体的に経営規模が小さいので、経費の嵩まないムラ内での契約講を続けているのだと説明してくれたが、旅行型・料亭型契約講の流行する背景は別途に考えてみる必要がある。大江町の十一月二十三日の前後は、われわれの宿泊した旅館には契約講の団体客が幾組もあり、タクシーの運転手も地元の契約に出て、動ける

車は少なかった。大江町では過疎の山間部を除いて、契約の懇親会はますます盛んになっているらしい。(松本)

注

(1) 調査は一九八〇年九月から翌年十一月にかけて四回行なった。大江町史編纂委員の沓沢喜代次氏、塩野平の渡辺銀太郎氏御夫妻にはとくにお世話になった。記して感謝の意を表したい。

(2) 『大江町資料』第四号、一九七七、一三三頁参照。

(3) 青宇については伊豆田忠悦「青宇と最上紅花」地方史研究協議会編『日本産業史大系3 東北地方篇』東大出版会、一九六〇、四三〜七二頁。菅田慶恩・横山昭男『山形県の歴史』山川出版社、一九七三、一六八頁参照。塩野平の宝暦年間寄帳の数値の意味するところは、当時青宇産出最盛期を終えていたか、あるいは藩で青宇産出量の実態を把握しきれず、申告量が少なかったというところが考えられる。月布川流域の場合、後者の可能性が強いようである。

(4) 『大江町史編纂資料』第一号、一九七五、二九二〜二九五頁。この「塩ノ平名寄帳」では塩野平十一名、他村者十四名が塩野平に土地を所有していた状況が記されている。

(5) 青宇の抜け荷が相当量あったとすれば、多くの戸数が存立できたかも知れない。

(6) 蒲生正男「日本のイエとムラ」大林太良監修『世界の民俗・東アジアII 日本・中国・朝鮮』第十三巻、一九七九、二十八頁。

あとがき

四事例の調査報告をふりかえって、「はしがき」でおことわりしたように、本稿がそれらの中間報告にとどまったことを今更のごとく痛感する。

第一部金山町の場合だけは調査期間もやや長く資料収集や分析もある程度深められたが、第二部以下の三事例ではまだまだ不徹底である。この点は第一部への紙数の偏りにも現れているが、これが紙数制限ともからまって、第二部以下の叙述に多少影響しているということもあろう。いずれにしても、はしがきで述べた通り、充実した完稿は他日を期したいと思う。さて本稿をしめくくるに当って、とりあえず現段階での問題点と思われるものを列挙しておくことにする。

1、山形県北部と中部では契約講の組織や機能に相違がみられ、前者が葬い契約(葬式講組)を主体とするのに対し、後者では概ねムラ契約として村落自治機構になっている。調査事例がごく僅かなので即断はできぬが、もしそうだとすると、前稿で扱った県南部ではムラ契約とみなしうるから、県北部の葬い契約的な性格をどう考えたらよいのか。両者の違いが発生的なものなのか、あるいはその後の変化によるのかは一つの問題となろう。

2、金山町の事例にみられる「町部」の形成とその変遷発展過程に対応した十余の契約講の成立は、一種の株講の多様な併存が、ある意味で社会成層にも結びつく様相を示唆する。近世初頭から現代(第二次大戦後)までの各契約講の成立時期の違いが、組織範域や営みに微妙な変差をもたらしており、村落社会の域をこえた社会結合のあり方を志向している。こうした事例は従来の調査報告になかったもので、われわれの研究視角の一つの拡充であった。

3、契約講の営みにおいて物的基盤としての共有財産が重きをなすことは前稿でも指摘したが、これは村落自治的なムラ契約の場合とくに重要に

なる。河北町沢畑ではこのことが最も顕著であるが、大蔵村赤松(北部)にもその一端が窺える。また葬い契約でも、山林田畑といった資産はないが、契約の成員権は若干の共有物・備品の使用权と結びつき、しばしば加入金納入が条件になることもあるから、共有財産の問題は軽視できない。

4、河北町沢畑の事例で親族組織との関連で重要なことは、カマエ(本分家関係)や親方衆(有力な本家格)との結びつきが、ある意味で契約講の潜在的なサブユニットになっていたようにも思われる。ふしがあることだ。この点の分析が浅いので不的確かもしれないが、このことは金山町の事例ともからんで契約講と村落構造論の問題にとって新たな視角をもたらすことになるだろう。

5、契約講が年齢集団体制(年齢階梯制)に対応して、しばしば年齢講——いくつかの年齢集団別の組織となる——の形態をとる場合があることは従来の諸研究(とくに宮城県の三陸牡鹿の調査事例)で指摘され、われわれも前稿でそれに触れたが、本稿の諸事例では前稿の山形県南部の事例同様、右と類比できるものはない。ただ大江町塩野平には大契約(戸主たちのムラ契約)・若衆契約・念仏講(主婦たちの契約)・若妻会(いわば嫁の契約)があつて、もちろん大契約がその中核だが、他の諸契約も各戸一名ですべて平等という同様な原則で組織運営されているから、年齢講的なかたちがたしかにある。類似的形態は河北町沢畑や大蔵村赤松にも認められる。こうしたことは、かかる村落共同体社会では、あつて当たり前とも思われるので、あえて指摘するほどのこともないかもしれないが、三陸牡鹿ほど加入脱退の年齢制限がないことが違っている。とする

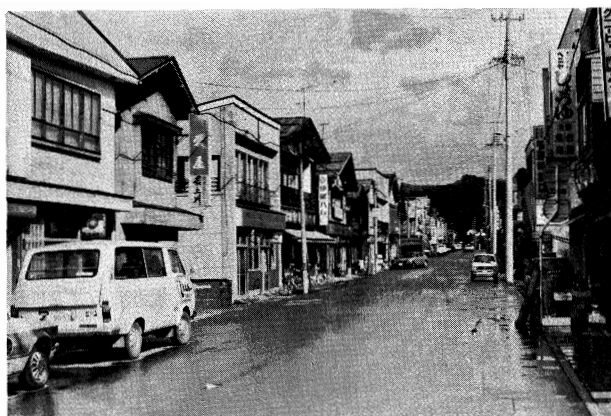
と、厳密な意味での年齢講は三陸牡鹿地方の特色だと考えた方がよいのかもしれない。年齢講とくに戸主契約と若衆契約は、前稿で指摘したように隠居制や姉家督と関連する問題でもあるのだが、本稿の諸事例ではこれに結びつく事実はほとんどなかった。

6、契約講のよつたつ原理は成員たる各イエの平等互酬性にあるが、このことはわれわれが参席した各調査地での契約総会の議事内容、審議状況やその後の宴会の雰囲気を通して実感したところである。例えば河北町上沢畑や大蔵村赤松の総会では、ムラの公民館改修・社堂修築などの諸経費負担とか道普請・用水堰修復の労役義務に関して、各戸均等割を原則に、実に細部にわたつて熱心に討議された。(写真参照)そしてこうしたことは、戦後民主化されてそうなのではないことは、過去の契約講記録や近世文書からも充分に窺えるのである。村落構造論的にいえば契約講の存する社会は概して対等平等なイエが横の連帯による互酬関係によつて構成されており、縦の上下的なヒエラルキー構造は稀薄だとみてよからう。その契約講が、従来同族的ヒエラルキーの濃い東北地方に、南部の宮城・山形を中心として分布することの意味は解明さるべき問題をいろいろ含むと考えられる。

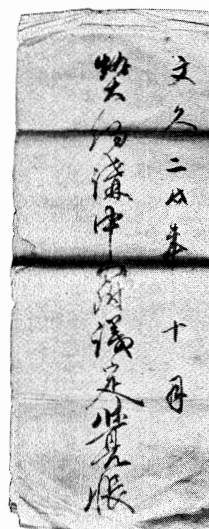
7、契約講は、同じく横の連帯性のつよい畿内や西日本の「宮座」のような神社(産土神)を中心とする祭祀組織ではない。「前稿」や本稿の諸事例、そして従来の諸報告でもこの点で宮座と類比できる諸事実はほとんどない。しかしながら、共有財産の管理運営(宮座では座田座林、契約講では契約山など)や組織とか営み(例えば当家・当番制や年齢集団そして村座・株座と村講・株講など)において共通する性格がいろいろある。

両者の比較考察が村落構造論的に重要な所以は「前稿」でも指摘したが、われわれは「史的構造論」として、これを推進すべきことを痛感している。本稿と併せてこの『年報』に掲載されているわれわれの共同研究報告「宮座の社会人類学的調査Ⅵ」も、云うまでもなくこうした研究視角によっている。

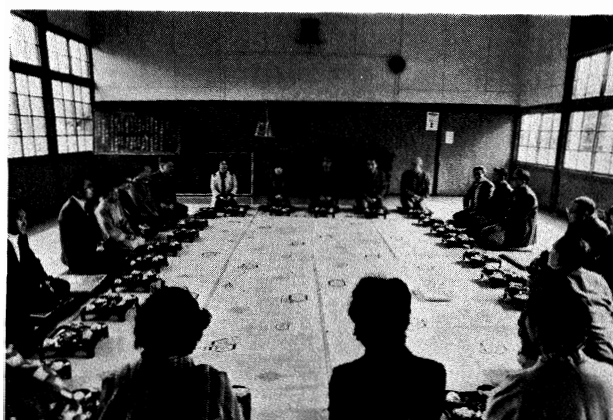
8、前稿の分析視角に過疎化と契約講の変容の問題があつたが、本稿でも同様な視点として出稼がある。即ち大江町塩野平以外の諸事例で多少ニュアンスを異にしながら、出稼によるさまざまな影響が契約講の営みの諸側面に現われている。今後、このような変化がどんな方向にむかうのかは村落構造にも関わることでもあるので、充分注目しなくてはなるまい。このことは農業構造の変化や都市化といった社会変動・文化変化の影響という全般的な問題にもつながるわけである。



金山町「町部」 七日町旧街道沿



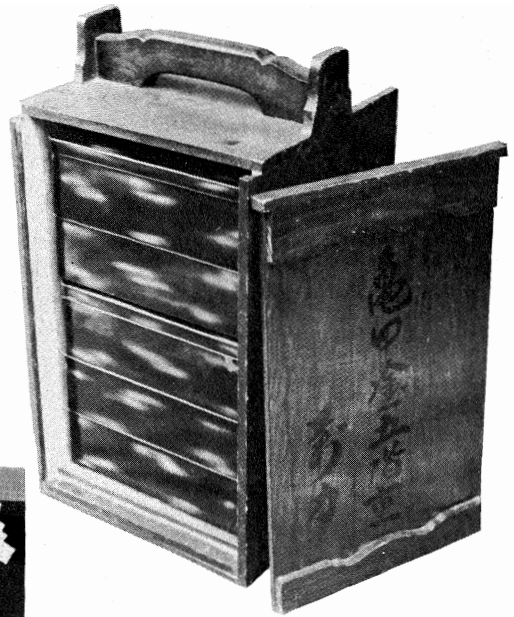
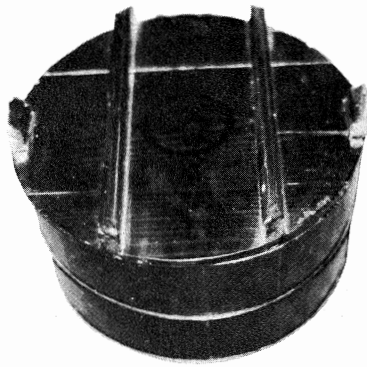
元契約・添組 文久2年(1862)の  
「契約講中面附議定覚帳」



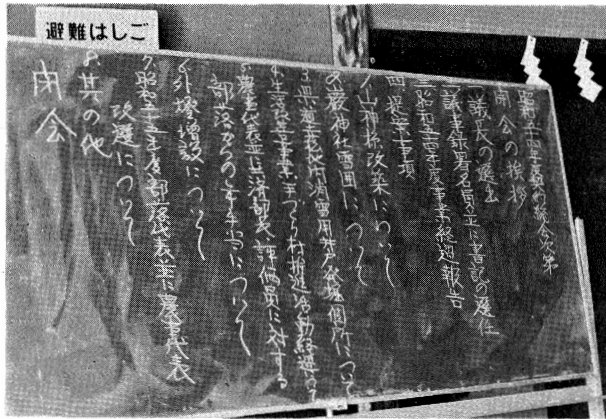
第三契約総会(昭和55年11月4日)



元契約総会(昭和55年11月5日)の膳



「重の内」に用いる櫃(左)と重箱(右)



← 赤松の契約総会議事次第(昭和54年11月8日)

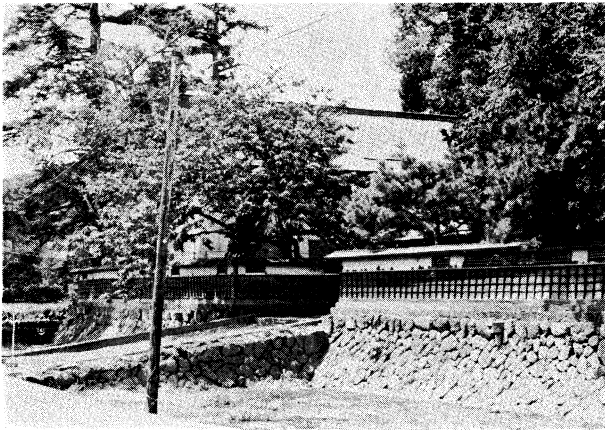


赤松 部落代表、農事代表の改選投票 →



← 同 開票

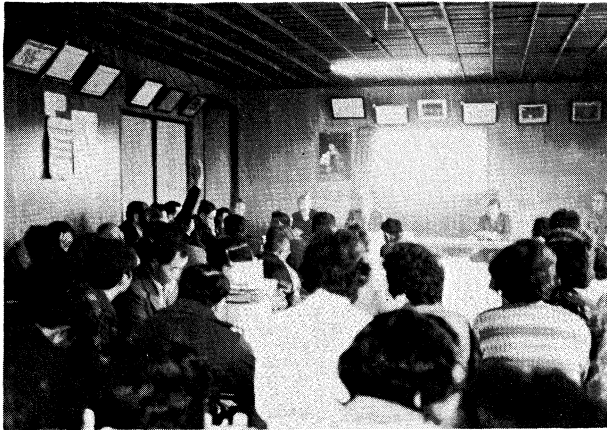




← 下沢畑の四郎兵衛屋敷



四郎兵衛カマエの墓地の一角 →

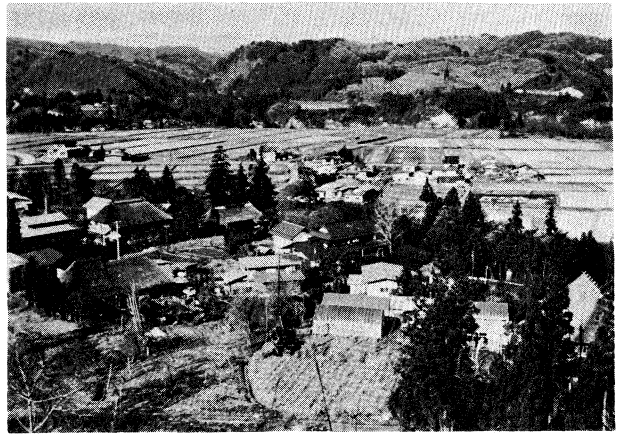


← 上沢畑の契約総会（昭和56年11月23日）

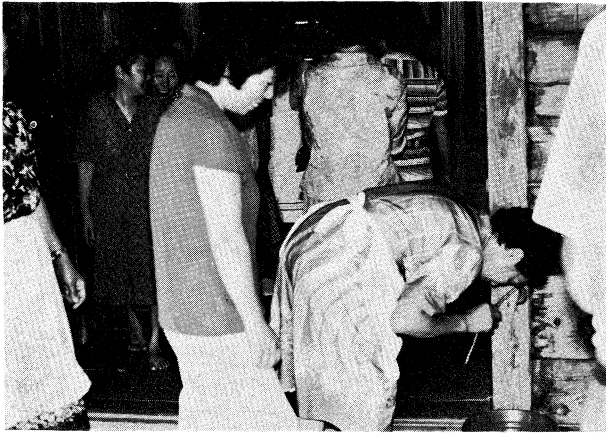


上沢畑 総会後の宴会 →

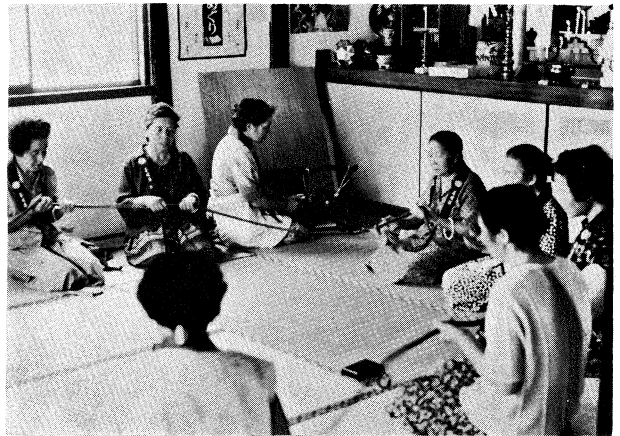




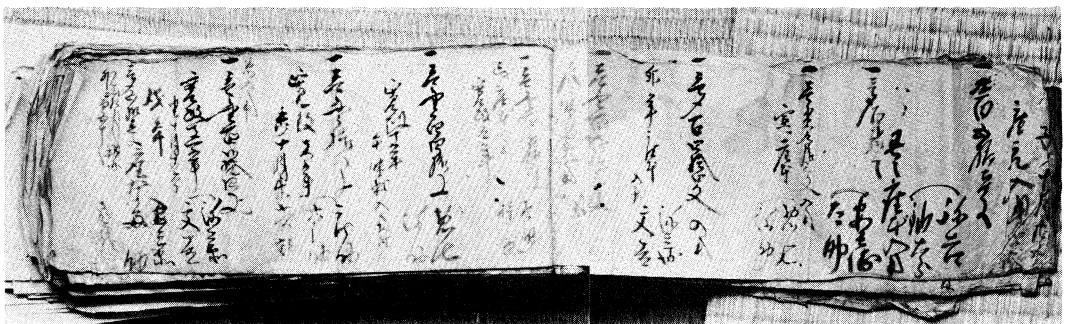
塩野平 モトの塩野平(手前) とハラの塩野平(奥)



塩野平 三宝荒神社本殿での数参り（昭和56年8月28日）



塩野平の念仏講



塩野平の契約帳

# 金山町契約加入世帯分布図

(昭和55年11月現在)

